

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第139集

しま ざき い せき
島 崎 遺 跡

でんぽう じほんごう いせき
伝法寺本郷遺跡

なか の ごう き た い せき
中之郷北遺跡

2006

(財)愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター



巻頭写真1 遺跡遠景1

- 1：鳥崎遺跡と伝法寺本郷遺跡（南上空から木曽川方面を臨む）
- 2：伝法寺本郷遺跡と宇福寺遺跡（北上空から伊勢湾方面を臨む）



巻頭写真2 遺跡遠景2

1：宇福寺遺跡と中之郷北遺跡（南上空から木曽川方面を臨む）

2：中之郷北遺跡と朝日遺跡（北上空から伊勢湾方面を臨む）



巻頭写真3 伝法寺本郷遺跡の遺構と遺物

1：C区小区画水田（古墳時代に帰属すると推定）

2：D区古代出土遺物（折戸10号窯式期の典型的な組成、金属製品生産関連遺物が伴う）



巻頭写真4 中之郷北遺跡の調査

- 1 : A区NR01の調査（南北に縦断する河川と杭列、7世紀に急速に埋没）
 2 : C区堆積状況（現地表からV層までの堆積状況）



巻頭写真5 中之郷北遺跡の遺構

1：H区SU04全景（IV d層で検出、松河戸Ⅰ式の良好な一括資料が出土）

2：I区古墳時代中期～古代竪穴住居群（5世紀前半、5世紀後半、7世紀前半、8世紀後半の竪穴住居が重複）



1



2

巻頭写真6 中之郷北遺跡の遺物1

1：各調査区IV b・IV a層出土遺物（松河戸Ⅰ式後半～松河戸Ⅱ式前半の土器に鍛冶関連遺物が伴出）

2：H区IV d・IV c層出土土器（松河戸Ⅰ式前半の良好な層位資料）



巻頭写真7 中之郷北遺跡の遺物2

1：Ⅰ区から出土した古墳時代中期の土器（松河戸Ⅱ式～宇田Ⅱ式の資料）

2：古代の出土遺物（D・Ⅰ区から出土した8世紀の資料）



巻頭写真8 宇福寺遺跡の土器

立会調査時に採集した集合資料、月影式の器台、箱清水式の甕、線刻土器、大型壺など特徴的な個体が多い

序

濃尾平野を南北に縦断する国道 22 号線は、愛知と岐阜をつなぐ幹線道路として近代以降重要な位置を占めてきました。また過去においても美濃街道や岐阜街道などとして、尾張と美濃との関係だけではなく、この地方全域にわたっての物資や情報の主要動脈としての役割を担ってきました。

今回これらの役割をさらに推し進める目的で、名古屋高速 3 号線（県道高速清州一宮線）の建設が行われることとなりました。それを受け私ども（財）愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センターは、愛知県教育委員会の委託事業として、平成 12 年度には島崎遺跡、平成 13 年度には伝法寺本郷遺跡と中之郷北遺跡の発掘調査を行ってまいりました。一宮市から西春町までという広範囲での調査ではありましたが、島崎遺跡では中世の集落が、伝法寺本郷遺跡では古代から中世の集落・水田が、中之郷北遺跡では古墳時代の集落が見つかるとともに、濃尾平野における遺跡の形成過程や地形環境の変化が明らかになりました。今後、本書の成果が学術的に活用され、ひいては埋蔵文化財の保護につながることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、地元住民の皆様をはじめ、関係者及び関係諸機関のご理解とご協力をいただきましたことに対して、厚く御礼を申し上げます。

平成 18 年 3 月

財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 古池 庸男

例 言

1. 本書は、愛知県一宮市に所在する島崎遺跡（県遺跡番号 02107：愛知県教育委員会 1994『愛知県遺跡地図（Ⅰ）尾張地区』）、伝法寺本郷遺跡（県遺跡番号 02108）、愛知県西春日井郡西春町中之郷北遺跡（県遺跡番号 19016）の発掘調査報告書で、西春日井郡西春町・一宮市宇福寺遺跡（県遺跡番号 19017・02114）の立会調査概要も同時に収録した。
2. 発掘調査は、県道高速清洲一宮線建設にかかる事前調査として、名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター（当時、現財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。なお、発掘調査にあたって、株式会社四門（島崎遺跡）、リメックス株式会社（当時、現テイケイトレード株式会社、伝法寺本郷遺跡）、佐伯建設工業株式会社（伝法寺本郷遺跡・中之郷北遺跡）より支援を受けた。
3. 調査期間と調査面積、調査担当者は、別表に示した（Ⅰ—第 2 章—第 2 表）。
4. 発掘調査にあたっては、次の各関係機関のご指導とご協力を得た。
愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター 名古屋高速道路公社
一宮市教育委員会 西春町教育委員会
5. 報告書作成にかかる整理作業には、次の方々のご助力を得た。
河合明美・安達崇子（調査研究補助員） 伊藤弘江 黒川陽子 時田典子 水野留香（整理補助員）
なお、出土遺物の写真撮影は、金子和久氏（写真工房・遊）、福岡栄氏（スタジオ・ピュア）に委託した。
6. 発掘調査、報告書作成の過程で、次の各氏をはじめ、多くの方々からご指導、ご協力を得た。
青木一男 青木勘時 岩原 剛 加納俊介 小池香津江 城ヶ谷和広 鈴木とよ江 田口一郎 土本典生
原田 幹 藤澤良祐 北條献示 森 泰通 若狭 徹
7. 本書の執筆は、Ⅰ、Ⅲ—第 1～3・5 章、Ⅳ—第 1～3 章・第 4 章（8）～（10）、第 5 章、Ⅴを早野浩二（本センター調査研究員）、Ⅱを宮腰健司（本センター主査）、Ⅲ—第 4 章（1）、Ⅳ—第 4 章（1）を山形秀樹（株式会社パレオ・ラボ）、Ⅲ—第 4 章（2）、Ⅳ—第 4 章（6）を植田弥生（株式会社パレオ・ラボ）、Ⅲ—第 4 章（3）を鶴飼雅弘（本センター調査研究員）、Ⅳ—第 4 章（2）を馬場健司・辻本裕也（パリノ・サーヴェイ株式会社）、（3）をパレオ・ラボ AMS 年代測定グループ、（4）を藤根久・長友純子（株式会社パレオ・ラボ）、（5）を小村美代子（株式会社パレオ・ラボ）、（7）を森勇一（愛知県立津島東高校）が担当した。
8. 遺構番号は原則として発掘調査時に用いたものを踏襲した。なお、使用する遺構記号は以下のとおりであるが、厳密な統一性はない。
S K；土坑、S E；井戸、S B；建物、S A；柵、S T；耕作地（水田・畑地）
S D；溝、S U；遺物集積、N R；自然流路、S X；その他不明遺構
9. 発掘調査および本書で使用了座標は、国土座標第Ⅶ系に準拠した。ただし、旧標準の「日本測地系」で表記している。
10. 本書で使用する土層の色調については、『新版標準土色帳』を参考に記述した。
11. 発掘調査の記録（実測図、写真等）は、財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
12. 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センター（愛知県海部郡弥富町前ヶ須新田字野方 802-24）で保管している。
13. 本書の編集はⅠ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴを早野浩二、Ⅱを宮腰健司が担当した。

目 次

巻頭写真

I	前章	1
	第1章 調査の経緯	2
	第2章 調査の経過	4
	第3章 周辺の環境	6
II	島崎遺跡	11
	第1章 遺跡の環境	12
	第2章 調査の概要	12
	第3章 遺構・遺物	15
	第4章 まとめ	49
III	伝法寺本郷遺跡	55
	第1章 調査の概要	56
	第2章 基本層序と検出遺構	58
	第3章 遺構と遺物	60
	第4章 分析・考察	92
	第5章 まとめ	104
IV	中之郷北遺跡	107
	第1章 調査の概要	108
	第2章 基本層序と検出遺構	110
	第3章 遺構と遺物	114
	第4章 分析・考察	220
	第5章 まとめ	294
V	宇福寺遺跡の調査	299
	第1章 調査の経緯	300
	第2章 立会調査の概要	304
	第3章 採集遺物の概要	310
	第4章 考察	331
	第5章 まとめ	348

報告書抄録

巻頭図版目次

巻頭写真 1 遺跡遠景 1
巻頭写真 2 遺跡遠景 2
巻頭写真 3 伝法寺本郷遺跡の遺構と遺物
巻頭写真 4 中之郷北遺跡の調査

巻頭写真 5 中之郷北遺跡の遺構
巻頭写真 6 中之郷北遺跡の遺物 1
巻頭写真 7 中之郷北遺跡の遺物 2
巻頭写真 8 宇福寺遺跡の土器

挿図目次

〈Ⅰ 前章〉

第 1 図 遺跡の位置
第 2 図 試掘地点と調査遺跡
第 3 図 権現山遺跡の縄文土器
第 4 図 伝西大門遺跡の須恵器
第 5 図 周辺の遺跡分布
第 6 図 遺跡周辺の地形

〈Ⅱ 島崎遺跡〉

第 7 図 遺跡周辺地形図
第 8 図 調査区位置図
第 9 図 A 区 SD04・05・06・07 土層断面
第 10 図 A 区第 1 面遺構図
第 11 図 A 区第 2 面遺構図
第 12 図 A 区東壁・南壁土層断面図
第 13 図 A 区出土遺物実測図
第 14 図 B 区 SX01 土層断面
第 15 図 B 区第 1 面遺構図
第 16 図 B 区第 2 面遺構図
第 17 図 B 区東壁・南壁土層断面図
第 18 図 B 区出土遺物実測図
第 19 図 C 区第 1 面遺構図
第 20 図 C 区第 2 面遺構図
第 21 図 C 区東壁・南壁土層断面図
第 22 図 D 区第 2 面遺構図
第 23 図 D 区東壁・北壁土層断面図
第 24 図 D 区 SK14、SK09・47・51・52 土層断面
第 25 図 D 区 SK30、SK05、SK34 土層断面
第 26 図 D 区出土遺物実測図
第 27 図 E 区 SK04、SK05 土層断面
第 28 図 E 区第 1 面遺構図

第 29 図 E 区第 2 面遺構図
第 30 図 E 区東壁・北壁土層断面図
第 31 図 E 区出土遺物実測図
第 32 図 F 区 SK51・52 土層断面
第 33 図 F 区第 1 面遺構図
第 34 図 F 区第 2 面遺構図
第 35 図 F 区東壁・北壁土層断面図
第 36 図 F 区出土銭貨拓本・X線写真
第 37 図 F 区出土遺物実測図
第 38 図 G 区出土遺物実測図
第 39 図 G 区第 1 面遺構図
第 40 図 G 区第 2 面遺構図
第 41 図 G 区西壁・北壁土層断面図
第 42 図 H 区出土遺物実測図
第 43 図 H 区第 2 面遺構図
第 44 図 H 区西壁・南壁土層断面図
第 45 図 I 区第 1 面遺構図
第 46 図 I 区第 2 面遺構図
第 47 図 I 区第 3 面遺構図
第 48 図 I 区東壁・北壁土層断面図
第 49 図 I 区 SD01 土層断面
第 50 図 I 区 SD02・03 土層断面
第 51 図 I 区出土遺物実測図 1
第 52 図 I 区出土遺物実測図 2
第 53 図 J 区第 1 面遺構図
第 54 図 J 区第 2 面遺構図
第 55 図 J 区東壁・南壁土層断面図
第 56 図 J 区出土遺物実測図
第 57 図 明治 17 年地籍図
第 58 図 加工円盤分布図

第 59 図 島崎遺跡主要遺構配置図

〈Ⅲ 伝法寺本郷遺跡〉

第 60 図 試掘調査の所見

第 61 図 伝法寺本郷遺跡調査区配置図

第 62 図 伝法寺本郷遺跡検出遺構の概要

第 63 図 伝法寺本郷遺跡調査区土層断面柱状図

第 64 図 A 区東壁土層断面図

第 65 図 A 区下面遺構図

第 66 図 A 区古代出土遺物実測図

第 67 図 A 区遺構土層断面図

第 68 図 A 区上面遺構図

第 69 図 A 区中世～近世出土遺物実測図

第 70 図 A 区出土金属製品生産関連遺物実測図

第 71 図 B 区東壁土層断面図

第 72 図 B 区遺構土層断面図

第 73 図 B 区遺構図

第 74 図 B 区出土遺物実測図

第 75 図 C 区東壁土層断面図

第 76 図 C 区遺構図

第 77 図 C 区出土遺物実測図

第 78 図 D 区東壁土層断面図

第 79 図 D 区遺構図

第 80 図 D 区 SB01 遺構図・遺物出土状態図

第 81 図 D 区 SB02 遺物出土状態図

第 82 図 D 区 SB02 土層断面図

第 83 図 D 区 SK02 遺構図

第 84 図 D 区出土遺物実測図

第 85 図 八王子遺跡出土鋳型（内型）実測図

第 86 図 D 区出土金属製品生産関連遺物実測図

第 87 図 E 区遺構図

第 88 図 E 区東壁土層断面図

第 89 図 E 区出土遺物実測図

第 90 図 F 区西壁土層断面図

第 91 図 F 区出土遺物実測図

第 92 図 F 区遺構図

第 93 図 G 区東壁土層断面図

第 94 図 G 区下面遺構図

第 95 図 G 区上面遺構図

第 96 図 G 区出土遺物実測図

第 97 図 伝法寺本郷遺跡調査区と地籍図の照合

第 98 図 丹羽郡伝法寺村絵図

第 99 図 春日井郡宇福寺村絵図

第 100 図 伝法寺本郷遺跡の景観復原

〈Ⅳ 中之郷北遺跡〉

第 101 図 試掘調査の所見

第 102 図 中之郷北遺跡調査区配置図

第 103 図 中之郷北遺跡検出遺構の概要

第 104 図 中之郷北遺跡調査区土層断面柱状図 1

第 105 図 中之郷北遺跡調査区土層断面柱状図 2

第 106 図 A 区東壁土層断面図

第 107 図 A 区 NR01 遺構図

第 108 図 A 区 NR01- 3 層杭列遺構図 1

第 109 図 A 区 NR01- 3 層杭列遺構図 2

第 110 図 A 区 NR01 遺物出土状況

第 111 図 A 区 NR01-4 層出土遺物実測図

第 112 図 A 区 NR01- 3 層出土遺物実測図

第 113 図 A 区 NR01- 3 層出土木製品実測図

第 114 図 A 区 I 層・SD04 出土遺物実測図

第 115 図 A 区中世～近世遺構図

第 116 図 B a 区東壁土層断面図

第 117 図 B a 区 NR03・01 遺構図

第 118 図 B a 区中世～近世遺構図

第 119 図 B a 区出土遺物実測図

第 120 図 B b 区古墳時代初頭遺構図

第 121 図 B b 区東壁土層断面図

第 122 図 B b 区古墳時代中期遺構図

第 123 図 B b 区 SU01 遺物出土状態図

第 124 図 B b 区出土遺物実測図

第 125 図 C 区西壁土層断面図

第 126 図 C 区古墳時代初頭遺構図

第 127 図 C 区古代遺構図

第 128 図 C 区近世遺構図 1

第 129 図 C 区出土遺物実測図

第 130 図 D 区西壁土層断面図

第 131 図 D 区古墳時代初頭・古墳時代後期遺構図

第 132 図 D 区古墳時代出土遺物実測図

第 133 図 D 区古代遺構図

第 134 図 D 区 SB03 遺構図

第 135 図	D 区 SB03 竈遺構図	第 174 図	I 区西壁土層断面図
第 136 図	D 区 SB03 支脚	第 175 図	I 区古墳時代中期遺構図
第 137 図	D 区 SB01・02 遺構図	第 176 図	I 区古墳時代中期～古代遺構図
第 138 図	D 区 SB04 遺構図	第 177 図	I 区 SB09・03 遺構図
第 139 図	D 区 SB05 遺構図	第 178 図	I 区 SB10 遺構図／遺物出土状態図
第 140 図	D 区 SB06・07・08 遺構図	第 179 図	I 区 SB07 遺物出土状態図
第 141 図	D 区中世遺構図	第 180 図	I 区 SK54・80 遺物出土状態図
第 142 図	D 区古代出土遺物実測図	第 181 図	I 区古墳時代出土遺物実測図 1
第 143 図	E 区西壁土層断面図	第 182 図	I 区古墳時代出土遺物実測図 2
第 144 図	E 区古代遺構図	第 183 図	I 区 SB08・06 遺構図
第 145 図	E 区Ⅳ層・Ⅱ層出土遺物実測図	第 184 図	I 区 SB05・04・02 遺構図
第 146 図	E 区出土石製品実測図	第 185 図	I 区 SB02 竈遺構図
第 147 図	E 区中世～近世遺構図	第 186 図	I 区 SB01 遺構図
第 148 図	F 区西壁土層断面図	第 187 図	I 区古墳時代中期～古代遺構変遷図
第 149 図	F 区古代～中世遺構図	第 188 図	I 区古代出土遺物実測図 1
第 150 図	F 区近世遺構図	第 189 図	I 区古代出土遺物実測図 2
第 151 図	F 区出土遺物実測図	第 190 図	I 区古代出土遺物実測図 3
第 152 図	F 区北壁土層断面図	第 191 図	I 区古代出土遺物実測図 4
第 153 図	D・E・F 区古墳時代水田遺構全体図	第 192 図	I 区中世遺構図
第 154 図	D・E・F 区古墳時代水田遺構図	第 193 図	I 区中世出土遺物実測図
第 155 図	G 区西壁土層断面図	第 194 図	I 区鉄製品・金属製品生産関連遺物実測図
第 156 図	G 区古墳時代中期／中世遺構図	第 195 図	J 区東壁土層断面図
第 157 図	G 区近世遺構図	第 196 図	J 区古代遺構図
第 158 図	G 区出土遺物実測図	第 197 図	J 区近世～近代遺構図
第 159 図	G 区出土金属製品実測図	第 198 図	J 区出土遺物実測図
第 160 図	H 区西壁土層断面図	第 199 図	J 区出土石製品・金属製品実測図
第 161 図	H 区古墳時代初頭遺構図	第 200 図	K 区西壁土層断面図
第 162 図	H 区 SU04 遺構図・遺物出土状態図	第 201 図	K 区近世～近代遺構図
第 163 図	H 区 SU01～03 遺構図・遺物出土状態図	第 202 図	K 区出土遺物実測図
第 164 図	H 区 SU04・Ⅴ層出土遺物実測図	第 203 図	調査地点の層序および分析層準
第 165 図	H 区Ⅳc 層・Ⅳb 層・SU01～03 出土遺物実測図	第 204 図	B a・B b 区の植物珪酸体含量
第 166 図	SD44 土層断面図	第 205 図	D・E 区の植物珪酸体含量
第 167 図	H 区古代遺構図	第 206 図	F・G 区の植物珪酸体含量
第 168 図	H 区中世遺構図	第 207 図	H・K 区の植物珪酸体含量
第 169 図	H 区近世遺構図	第 208 図	測定試料実測図
第 170 図	H 区近代遺構図	第 209 図	胎土分析試料実測図
第 171 図	H 区古墳時代後期～古代出土遺物実測図	第 210 図	赤色顔料の蛍光 X 線スペクトル図
第 172 図	H 区Ⅰ層・中世～近代出土遺物実測図	第 211 図	月縄手遺跡土坑
第 173 図	H 区出土石製品・鉄製品・金属製品生産関連遺物実測図	第 212 図	H 区Ⅳ層中の土器群包含状況

第 213 図	H 区Ⅳ層出土土器群の組成	第 245 図	P 83 工区土器分布状況模式図
第 214 図	中之郷北遺跡Ⅳ層層位資料と月縄手遺跡土坑資料との対比	第 246 図	P 82 工区土器分布状況模式図
第 215 図	S 字甕口縁部形状の比較	第 247 図	P 80 工区土器分布状況模式図
第 216 図	高杯杯部稜径と稜深比の比較	第 248 図	調査区土層断面柱状図 1
第 217 図	松河戸遺跡 SK201 出土土器	第 249 図	調査区土層断面柱状図 2
第 218 図	I 区出土土器の変遷	第 250 図	P 86 工区採集遺物実測図
第 219 図	八王子遺跡 NR01 最上層出土土器	第 251 図	P 84 工区採集遺物実測図
第 220 図	朝日遺跡新資料館地点出土土器	第 252 図	P 83 工区採集遺物実測図 1
第 221 図	朝日遺跡各地点出土土器	第 253 図	P 83 工区採集遺物実測図 2
第 222 図	鍛冶関連遺物出土遺跡の分布	第 254 図	P 83 工区採集遺物実測図 3
第 223 図	中之郷北遺跡の轆羽口と関連資料	第 255 図	P 83 工区採集遺物実測図 4
第 224 図	福田遺跡の鍛冶関連遺物と出土遺構	第 256 図	P 83 工区採集遺物実測図 5
第 225 図	法海寺遺跡の鍛冶関連遺物と関連資料	第 257 図	P 83 工区採集遺物実測図 6
第 226 図	吉田奥遺跡 3 号住居跡と出土遺物	第 258 図	P 82 工区採集遺物実測図 1
第 227 図	門間沼遺跡の鍛冶関連遺物と関連資料	第 259 図	P 82 工区採集遺物実測図 2
第 228 図	大泉遺跡の轆羽口	第 260 図	P 82 工区採集遺物実測図 3
第 229 図	石川条里遺跡の轆羽口	第 261 図	P 81 工区採集遺物実測図
第 230 図	轆羽口の形態の変遷	第 262 図	P 80 工区採集遺物実測図 1
第 231 図	尾張地域における古墳時代中期の轆羽口の変遷	第 263 図	P 80 工区採集遺物実測図 2
第 232 図	四反畑遺跡と大泉遺跡の韓式系土器甌	第 264 図	廻間 I 式 0 ～ 1 段階の土器
第 233 図	権現山 1 号墳の石室	第 265 図	宇福寺遺跡器種組成（遺跡総計）
第 234 図	中之郷北遺跡と大淵遺跡の管状土鍾	第 266 図	宇福寺遺跡器種組成（各工区・遺構）
第 235 図	飯守神遺跡の「美濃」刻印須恵器	第 267 図	関連遺跡分布図
第 236 図	美濃須衛産須恵器の諸例	第 268 図	箱清水式の主要器種
第 237 図	三河型甕の諸例と関連資料	第 269 図	宇福寺遺跡と小森遺跡の箱清水式土器
第 238 図	川原石積み横穴式石室・「美濃」刻印須恵器・三河型甕・製塩土器の分布	第 270 図	箱清水式土器様式圏における東海系土器
第 239 図	中之郷北遺跡の景観復原	第 271 図	北陸系土器と関連資料
第 240 図	中之郷北遺跡調査区と地籍図の照合	第 272 図	布留式土器と関連資料
第 241 図	春日井郡中之郷村絵図	第 273 図	受口甕と S 字甕 0 類
〈V 宇福寺遺跡の調査〉		第 274 図	朝日遺跡の布留式甕
第 242 図	試掘調査の所見	第 275 図	畿内における東海系と山陰系の共存
第 243 図	宇福寺遺跡立会調査工区―北半	第 276 図	宇福寺遺跡と元屋敷遺跡の土器に施された線刻
第 244 図	宇福寺遺跡立会調査工区―南半	第 277 図	宇福寺遺跡の範囲と周辺の遺跡

写真目次

〈Ⅰ 前章〉

写真 1 遺跡の現況

写真 2 馬見塚遺跡

写真 3 稲荷山古墳と高塚古墳

写真 4 現況の島畑

〈Ⅱ 島崎遺跡〉

写真 5 調査区の位置

写真 6 調査区遠景

写真 7 調査風景

写真 8 A区

写真 9 B区

写真 10 C区

写真 11 D区

写真 12 E区

写真 13 F区

写真 14 G区

写真 15 H区

写真 16 I区第1面

写真 17 I区第2面

写真 18 I区第3面

写真 19 J区

写真 20 各調査区出土遺物 1

写真 21 各調査区出土遺物 2

〈Ⅲ 伝法寺本郷遺跡〉

写真 22 伝法寺本郷遺跡調査風景

写真 23 A区NR01

写真 24 A区上面遺構

写真 25 B区NR01／上面遺構

写真 26 C区下面／上面遺構

写真 27 D区遺物出土状況

写真 28 D区古代遺構

写真 29 D区出土金属製品生産関連遺物

写真 30 E～G区全景／E区下面／上面遺構全景

写真 31 F区下面／上面遺構

写真 32 G区下面／上面遺構全景

写真 33 各調査区出土遺物

写真 34 A区NR01出土自然木の材組織光学顕微鏡写真 1

写真 35 A区NR01出土自然木の材組織光学顕微鏡写真 2

写真 36 A区NR01出土自然木の材組織光学顕微鏡写真 3

〈Ⅳ 中之郷北遺跡〉

写真 37 中之郷北遺跡調査風景

写真 38 A区NR01

写真 39 A区出土遺物

写真 40 A区出土木製品

写真 41 A区NR01遺物出土状況

写真 42 A区土層断面／中世～近世遺構

写真 43 B a 区土層断面／NR01／中世～近世遺構

写真 44 B b 区古墳時代初頭遺構／SU01

写真 45 古墳時代初頭遺構

写真 46 C区西壁土層断面

写真 47 C区古代／近世遺構全景

写真 48 B a ・ B b ・ C区出土遺物

写真 49 D区古墳時代初頭／古墳時代後期遺構全景

写真 50 D区IV b 層遺物出土状況

写真 51 D区古代／中世遺構

写真 52 D区出土遺物

写真 53 E区古墳時代／古代／中世～近世遺構

写真 54 D区古墳時代水田全景

写真 55 F区古墳時代／古代～中世遺構

写真 56 G区NR02／NR01／近世遺構／土層断面

写真 57 G区出土金属製品X線写真

写真 58 E ・ F ・ G区出土遺物

写真 59 H区古墳時代初頭／前期遺構

写真 60 H区古墳時代中期遺構

写真 61 H区古代／中世／近世／近代遺構全景

写真 62 H区出土遺物 1

写真 63 H区出土遺物 2

写真 64 I区NR01全景

写真 65 I区古墳時代中期～古代遺構全景

写真 66 I区 1 期竪穴住居

写真 67 I区 2 期竪穴住居

写真 68 I区土坑遺物出土状況

写真 69 I区古墳時代（1・2期）出土遺物

写真 70 I区 3 期竪穴住居

写真71	I区4期竪穴住居1	写真89	出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真5
写真72	I区4期竪穴住居2	写真90	出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真6
写真73	I区中世遺構全景	写真91	福田遺跡の韃羽口先端部分
写真74	I区古代・中世出土遺物	写真92	法海寺遺跡の韃羽口
写真75	鉄製品・金属製品生産関連遺物・石製品		〈V 宇福寺遺跡の調査〉
写真76	J区東壁土層断面	写真93	宇福寺遺跡調査風景
写真77	J区古代／近世遺構全景	写真94	P83工区土層断面／遺物出土状況
写真78	J区中世～近代遺構全景	写真95	P82工区土層断面
写真79	K区近世～近代遺構／土層断面	写真96	P81／P80工区土層断面
写真80	植物珪酸体顕微鏡写真1	写真97	布留式高杯（5）の製作技法
写真81	植物珪酸体顕微鏡写真2	写真98	P83工区採集遺物1
写真82	土器薄片の顕微鏡写真	写真99	P83工区採集遺物2
写真83	赤色顔料の付着状況	写真100	P83工区採集遺物3
写真84	測定に使用した赤色顔料	写真101	P82工区採集遺物1
写真85	出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真1	写真102	P82工区採集遺物2
写真86	出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真2	写真103	P80工区採集遺物
写真87	出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真3	写真104	脚頂部のキザミ（門間沼遺跡）
写真88	出土材・杭の材組織光学顕微鏡写真4		

挿表目次

〈I 前章〉	第12表	放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果
第1表 調査工程表	第13表	出土土器の詳細とその肉眼的特徴
〈II 島崎遺跡〉	第14表	出土土器の粘土と砂粒の特徴
第2表 F区出土銭貨一覧表	第15表	胎土中の岩石片の分類と組み合わせ
〈III 伝法寺本郷遺跡〉	第16表	赤色顔料から検出された元素と顔料の種類
第3表 放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果	第17表	出土木製品・木材の樹種同定結果一覧
第4表 A区NR01出土自然木樹種同定結果一覧	第18表	形状・層位ごとの検出樹種集計
〈IV 中之郷北遺跡〉	第19表	中之郷北遺跡から産出した昆虫化石
第5表 放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果	第20表	H区IV層出土土器群の組成
第6表 分析試料一覧	第21表	松河戸・宇田式土器編年と放射性炭素年代測定値との対比
第7表 Ba・Bb区の植物珪酸体分析結果	第22表	鍛冶関連遺物一覧表
第8表 D・E区の植物珪酸体分析結果		〈V 宇福寺遺跡の調査〉
第9表 F・G区の植物珪酸体分析結果	第23表	編年対照表
第10表 H・K区の植物珪酸体分析結果	第24表	宇福寺遺跡器種組成表（遺跡総計）
第11表 測定試料及び処理	第25表	宇福寺遺跡器種組成表（各工区・遺構）

I 前章

第1章 調査の経緯

遺跡 島崎遺跡は一宮市島崎2丁目ほか、伝法寺本郷は一宮市丹陽町伝法寺、中之郷北遺跡は西春日井郡西春日町中之郷にそれぞれ所在する（第1図）。遺跡周囲には、宅地、工業地、商業地が密集し、耕作地が点在する大都市近郊に特徴的な景観が広がっている。

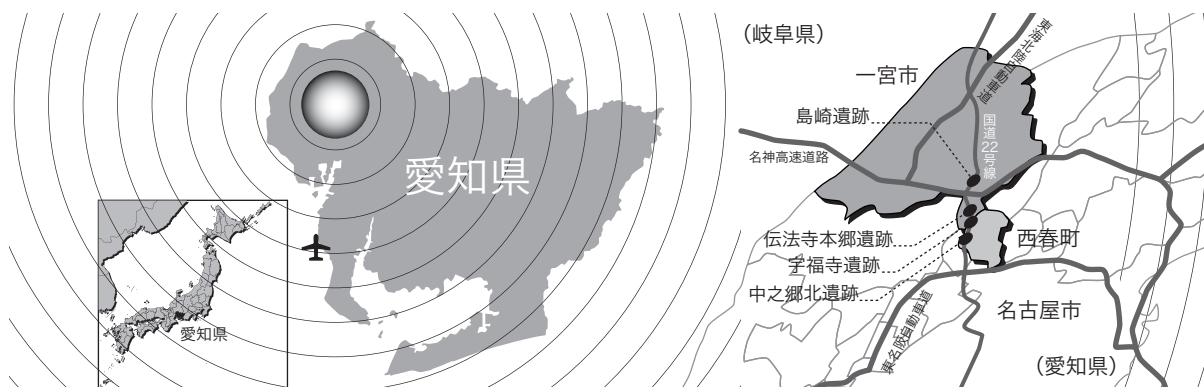
名古屋高速3号線 これらの3遺跡は、名古屋高速3号線（県道高速清洲一宮線）建設計画に伴う埋蔵文化財の有無照会に応じて、平成10年8～10月に愛知県教育委員会文化財課（当時、現愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室）と愛知県埋蔵文化財調査センターが一般国道22号線の周辺において試掘調査を実施した結果、新たに発見、登録された遺跡である。

試掘調査 名古屋高速3号線建設にかかる試掘調査は、全長約8kmの予定工区周辺に、A—1からN—2までの28地点を設置し（第2図）、中世陶器を包含する層を確認したK—2を含む周辺地区、H—2・H—3を含む地区、古墳時代の遺構と遺物を確認したE—2を含む周辺地区について、発掘調査が必要であることを回答した。なお、L—1・L—2を含む地区、J—1・J—2を含む地区、H—1を含む地区、F—1・G—1を含む地区、C—1・C—2を含む地区については、試掘調査において遺構が確認されず、包含層が希薄であったことから、立会調査による対応とし、その他の地区の周辺は、遺構と遺物が確認されなかったことから、保護法上支障がないものと判断された。試掘調査によって所在を確認した埋蔵文化財は、該当教育委員会との協議によって、K—2周囲を島崎遺跡（遺跡番号02107）、H—2・H—3周囲を伝法寺本郷遺跡（遺跡番号02108）、E—2周囲を中之郷北遺跡（遺跡番号19016）として決定し、新発見の遺跡として新規に登録した。なお、宇福寺遺跡（西春日井郡西春日町宇福寺他、遺跡番号19017・02114）は、立会調査が必要とされたH—1、F—1・G—1を含む地区の工事掘削時に古墳時代の遺物が大量に発見されたことを受け、新規に登録された遺跡である。

発掘調査 発掘調査は、県道高速清洲一宮線建設の事前調査として、名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター（当時、現財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。

文献

愛知県教育委員会・財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター2000『愛知県埋蔵文化財情報』15 平成10年度



第1図 遺跡の位置

第2章 調査の経過

調査区の設定

名古屋高速3号線は、一般国道22号線に高架構造で併設されるため、発掘調査は橋脚建設に際して、掘削工事に影響を受ける範囲を調査対象として、各工区に調査区を設定した。各遺跡において調査対象とした調査区と調査面積、調査期間はそれぞれ、島崎遺跡が10工区（P137～128／A～J区）計2,000㎡、平成13年1～3月、伝法寺本郷遺跡が7工区（P96～90／A～G区）計1,600㎡、平成13年4～5・8～9月、中之郷北遺跡が12工区（P65～55・A63／A、Ba・Bb、C～K）計2,400㎡、平成13年10月～平成14年2月である（第1表）。なお、各遺跡の調査概要については、各報文中において改めて記述する。

調査の工程

報告書作成

洗浄、注記までの整理作業は、平成12・13年度中に実施し、接合、復元、実測、写真撮影、収納等の整理作業と報告書の執筆、編集は、島崎遺跡を平成17年4～6月の3ヶ月、伝法寺本郷遺跡を平成17年5月の1ヶ月、中之郷北遺跡と宇福寺遺跡を平成17年6～9月の4ヶ月の期間内に実施し、平成18年3月に本書を刊行した。

文献

宮腰健司・織部匡久2001「島崎遺跡」『年報』平成12年度 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
 宮腰健司2002「島崎遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報』17 平成12年度 愛知県教育委員会・財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
 鵜飼雅弘・早野浩二2003「伝法寺本郷遺跡」『年報』平成13年度 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
 鵜飼雅弘・早野浩二2003「中之郷北遺跡」『年報』平成13年度 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
 鵜飼雅弘2004「伝法寺本郷遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報』18 平成13年度 愛知県教育委員会・財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
 鵜飼雅弘2004「中之郷北遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報』18 平成13年度 愛知県教育委員会・財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

第1表 調査工程表

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
2000年度 担当／服部信博 宮腰健司 織部匡久										J I H	G F E D C B A	
2001年度 担当／石黒立人 鵜飼雅弘 早野浩二		A B C D				E F G	K J I H G	F E D C B A				P83 P82 P81
2002年度 (立会)	P80	P77 P78 P76		P86 P84								
遺跡	島崎遺跡				伝法寺本郷遺跡				中之郷北遺跡			
工区	P137～128工区				P96～90工区				P65～55・A63工区			
調査区／調査面積	A～K区／2,000㎡				A～G区／1,600㎡				A～K区／2,400㎡			
発掘届出通知	12埋セ第173号・2000.12.5 12教生第216-40号・2000.12.25				12埋セ第208-14号・2001.3.16 12教生第216-46号・2001.3.28				13埋セ第72号・2001.8.24 13教生第36-10号・2001.9.13			



島崎遺跡調査着手前（I・J区）



島崎遺跡調査完了後（島崎1丁目交差点）



伝法寺本郷遺跡調査着手前（C区）



伝法寺本郷遺跡調査完了後（伝法寺交差点）



宇福寺遺跡調査着手直後（P83工区）



宇福寺遺跡調査完了後（五日市場交差点）



中之郷北遺跡調査着手前（F・G・H区）



中之郷北遺跡調査完了後（中之郷交差点）

写真1 遺跡の現況

第3章 周辺の環境

地形・地質

濃尾平野

伊勢湾を臨む濃尾平野は、西縁を養老山地、東縁を台地や段丘群の発達する更新統堆積物によって画される平野で、わが国第三位の広大な面積を誇る。木曽川を隔てた左岸域（愛知県側）の扇状地帯、自然堤防帯、三角州帯からなる平野面は尾張平野とも呼ばれ、その主要部分は古木曽川水系の諸河川がもたらした夥しい堆積物である第四紀沖積層によって覆われている。沖積層それぞれの岩相分布状態は、扇状地帯が礫質層、自然堤防帯が砂質層、臨海三角州帯が泥質層である。

尾張平野



写真2 馬見塚遺跡（県指定史跡）

遺跡の立地と周辺の遺跡

遺跡の立地

一宮市南東部に所在する島崎遺跡、伝法寺本郷遺跡、西春日井郡西春町西部に所在する中之郷北遺跡、宇福寺遺跡は、いずれも木曽川系自然堤防帯の緩傾斜面に立地する。五条川水系の岩倉市域、一宮市南東部域、西春町東部域、西春日井郡師勝町域には、砂質層を岩層とする相対的に古い自然堤防が発達し、縄文・弥生・古墳時代の遺跡が密集して形成されている（第5・6図）。その代表的な遺跡（古墳）が、西北出遺跡（岩倉市／縄文）、権現山遺跡（同／縄文・古墳）、大地遺跡（同／縄文・弥生）、小森遺跡（同／古墳）、馬見塚遺跡（一宮市／縄文・弥生・古墳）、三ツ井遺跡（同／縄文・弥生・古墳）、猫島遺跡（同／縄文・弥生）、蕪池遺跡（同／弥生）、伝法寺野田遺跡（同／弥生）、元屋敷遺跡（同／弥生・古墳）、西大門遺跡（同／弥生・古墳）、稲荷山古墳（同）、高塚古墳（西春町）、堤下遺跡（師勝町／縄文）、石塚遺跡（同／古墳）、能田旭古墳（同／古墳）である。なお、同じく五条川水系に属する朝日遺跡（春日町・清須市・名古屋市西区／縄文・弥生・古墳）は、中之郷北遺跡から下流方向へ約2.5kmの位置にある。

五条川水系の遺跡

日光川水系の遺跡

一方で、日光川水系の一宮市西部域においても同様に古い自然堤防が発達し、弥生・古墳時代の遺跡の密集域が形成される。その代表的な遺跡（古墳）が、西上免遺跡（弥生・古墳）、今伊勢車塚古墳、八王子遺跡（弥生・古墳）、一宮西高校二夕子遺跡（弥生）、北川田遺跡（弥生）、萩原中学校河田遺跡（弥生）である。



第3図 権現山遺跡の縄文土器

その両地域の間接地帯である青木川、三宅川水系の稲沢市域に発達する自然堤防は相対的に新しく、地表には低塑性粘土が厚く堆積する。この地域で遺跡形成が活発化するの古代以降で、奈良時代には国府と国分二寺が、市域東部の下津地区には鎌倉時代に鎌倉街道の宿駅として折戸宿（弘安年間以降、「折戸」は「下津」と表記）、



写真3 稲荷山古墳（左、一宮市指定史跡）と高塚古墳（右）

室町時代に尾張国の守護所（下津城）が設置される。なお、尾張国府の所在が推定される稲沢市松下町付近は、宇福寺遺跡から西へ約3km、下津城跡と鎌倉街道は伝法寺本郷遺跡から西へ約1kmの位置にある。伝法寺本郷遺跡付近には九日市場、五日市場の地名が残り、正和3年（1314）の「六波羅御教書案」には「下津五日市」とあることから、下津宿との関係も窺われる。

五条川、青木川の両岸にそれぞれ立地する島崎遺跡、伝法寺本郷遺跡、中之郷北遺跡・宇福寺遺跡は、五条川水系の岩倉市や一宮市南東部域と青木川水系の稲沢市域両地域の特徴を帯びていることは容易に想像される。また同時に、これらの遺跡が尾張地域の、地形発達史、土地利用史の動的な描写に欠くべからざる存在であることも明らかである。

文献

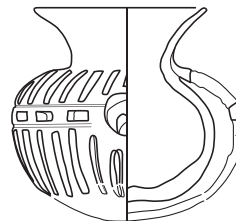
澄田正一・大参義一・岩野見司1967『新編一宮市史』資料編二 一宮市

大参義一・岩野見司1974『新編一宮市史』資料編四 一宮市
井関弘太郎1981「自然」『新修稲沢市史』研究編三 地理 稲沢市

稲葉伸道他1990『新修稲沢市史』本文編上 稲沢市

海津正倫1994『沖積低地の古環境学』古今書院

伊藤秋男編1994『高塚古墳発掘調査報告書』西春町教育委員会
早野浩二編2003『権現山遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第110集 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

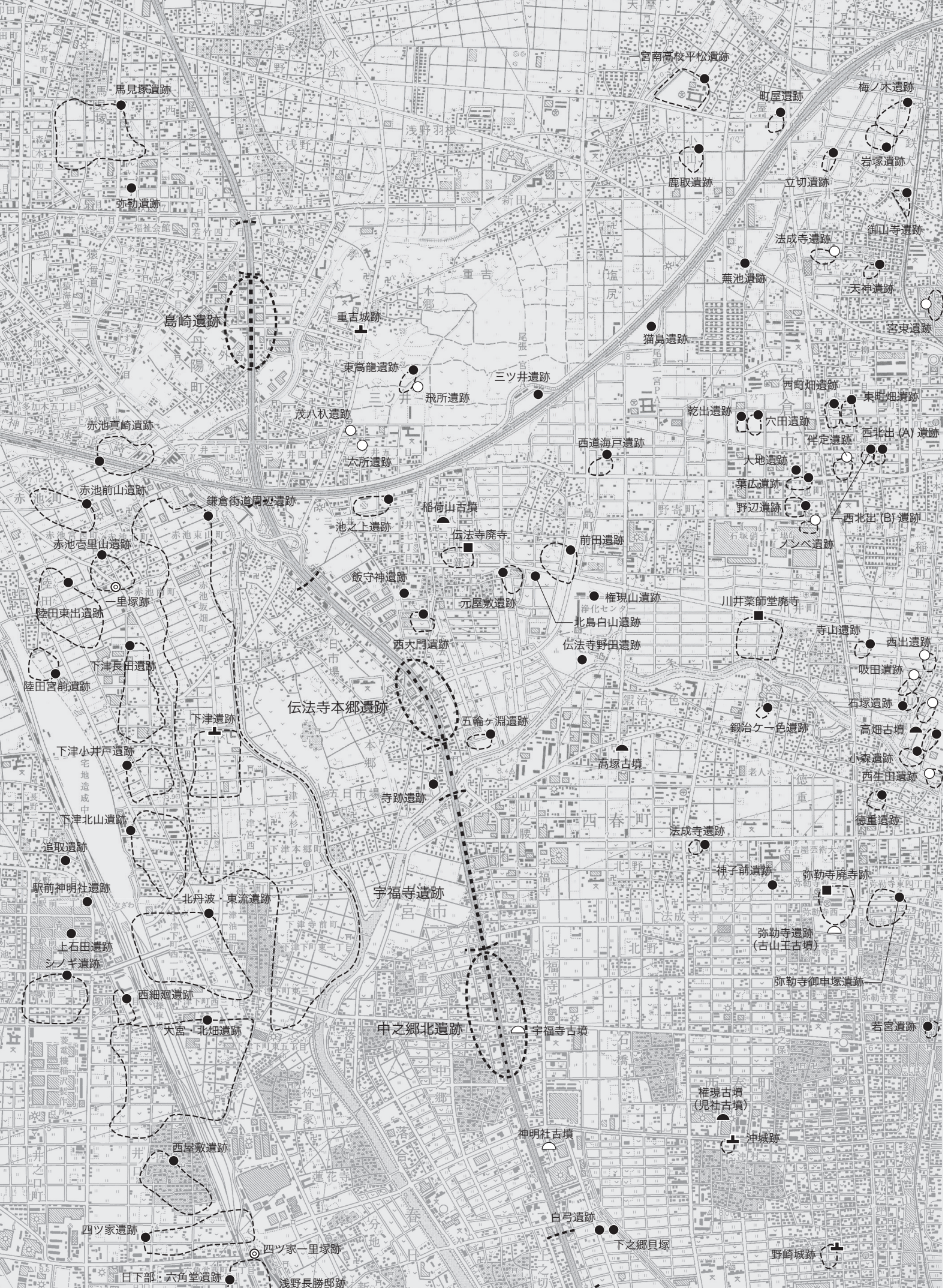


第4図 伝西大門遺跡の須恵器

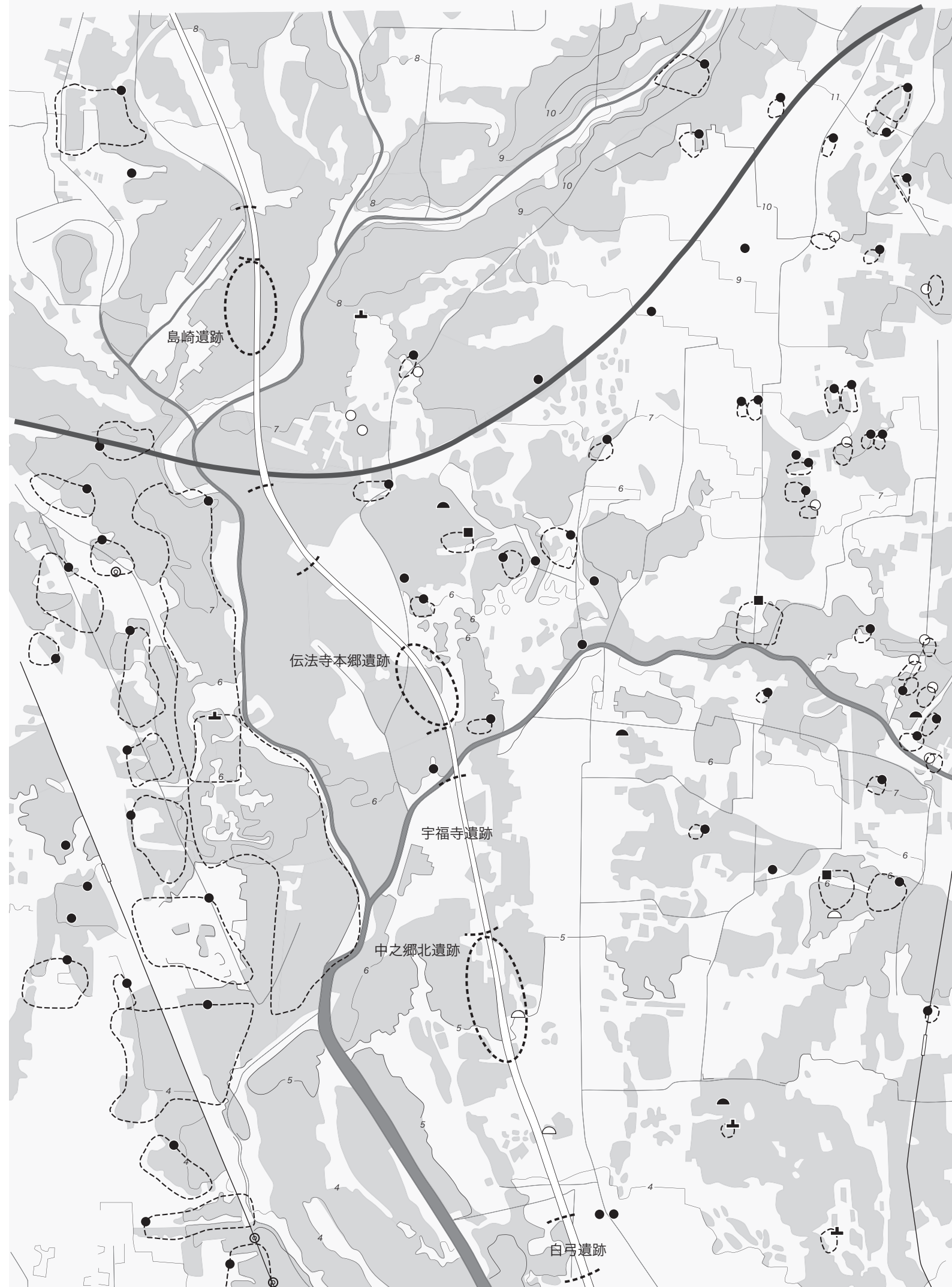


写真4 現況の島畑（一宮市丹陽町三ツ井地区）

国府と守護所



第5図 周辺の遺跡分布 (1:25,000)



第6図 遺跡周辺の地形 (1:25,000)

III 伝法寺本郷遺跡

第1章 調査の概要

試掘調査

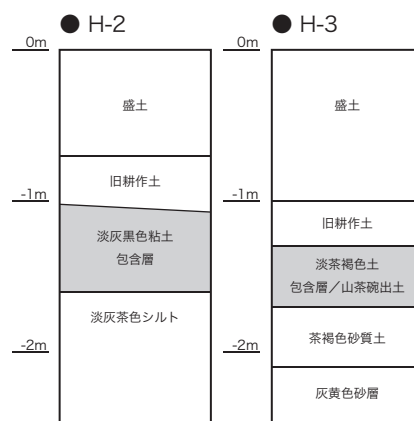
調査区の設定

伝法寺本郷遺跡の遺跡範囲は、愛知県教育委員会・愛知県埋蔵文化財調査センターが実施した試掘調査の所見（試掘地点 H-2、H-3、第2・60 図）を受けて確定した。調査区は国道 22 号線の路線上、全長約 400 m の工区の橋脚建設予定地に設定した。設定した調査区は伝法寺交差点を介して、交差点以北の P96 ～ 94 工区にそれぞれ A ～ C 区の 3 調査区、交差点以南の P93 ～ 90 にそれぞれ D ～ G 区の 4 調査区、計 7 調査区である（第 61 図）。

発掘調査

発掘調査は、道路建設施工の関係上、A ～ D 区の 4 調査区を 2001 年 4 ～ 5 月、E ～ G 区の 3 調査区を 2001 年 8 ～ 9 月に実施した（第 1 表）。各調査区は南北約 160 m、東西約 100 m の掘削範囲に対して、工法の関係上、調査対象は南北約 120 m、東西約 60 m の範囲に限定せざるをえなかった。表土除去と埋め戻し、調査中の排出土の処理は、名古屋高速道路の施工業者が実施した。なお、調査期間中の 4 月 23 日、丹陽南小学校の児童・教諭約 50 名による発掘調査の見学を受け入れた。

発掘調査の見学



第60図 試掘調査の所見



A区調査風景



C区調査風景



D区調査風景



E区調査風景

写真22 伝法寺本郷遺跡調査風景



第61図 伝法寺本郷遺跡調査区配置図 (1:2,500)

第2章 基本層序と検出遺構

(1) 基本層序

層序

伝法寺本郷遺跡の南北の層序断面模式図が第63図である。図は、現五条川に近いD・E・F・G区が相対的に高燥で、A・B・C区が低湿であることを示す。同時に、C区からD区（伝法寺交差点付近）にかけての地点が自然堤防状微高地と後背湿地の境界に相当することも理解される。

中世と近世

調査区が設定された道路面の標高は7m前後で、国道敷設時に盛られた客土によって周囲の宅地や耕作地より約1m高くなっている。客土下位は旧耕作土で、旧耕作土を除去した面を中世と近世の遺構検出面とした。中世と近世の遺構検出面はA区が約3.3mで最も低く、E・F区が約5.8mで最も高い。旧耕作土直下の堆積は、A・B区が中世前期までに河川内に堆積した灰白色細～中粒砂、C区が中～粗粒砂、D区以南が黄色または灰色を基調としたシルトである。D区では、客土直下に灰色シルトを基調とする古代の遺物包含層が堆積し、その下位の黄褐色シルト上面(標高約4.3m)を古代の遺構検出面とした。

古代

古墳時代水田

古代、中近世の遺構面下位には灰黄～灰色シルトが堆積し、さらにその下位には均質な黒色粘土層が堆積する。黒色粘土層は、河川活動によって失われたA・B区を除いて各調査区に安定して堆積する鍵層で、層厚は約0.2mである。その黒色粘土層上面では古墳時代に帰属すると考えられる水田を検出した。検出面はC区付近が標高約3.2mと低く、F区付近が標高約4.3mと高い。その下位は灰色粘土層、黒色粘土層が連続して堆積するが、その下位の層序の確認は湧水により断念した。

(2) 検出遺構

水田と島畑

中世の遺構群

古代の包含層・遺構

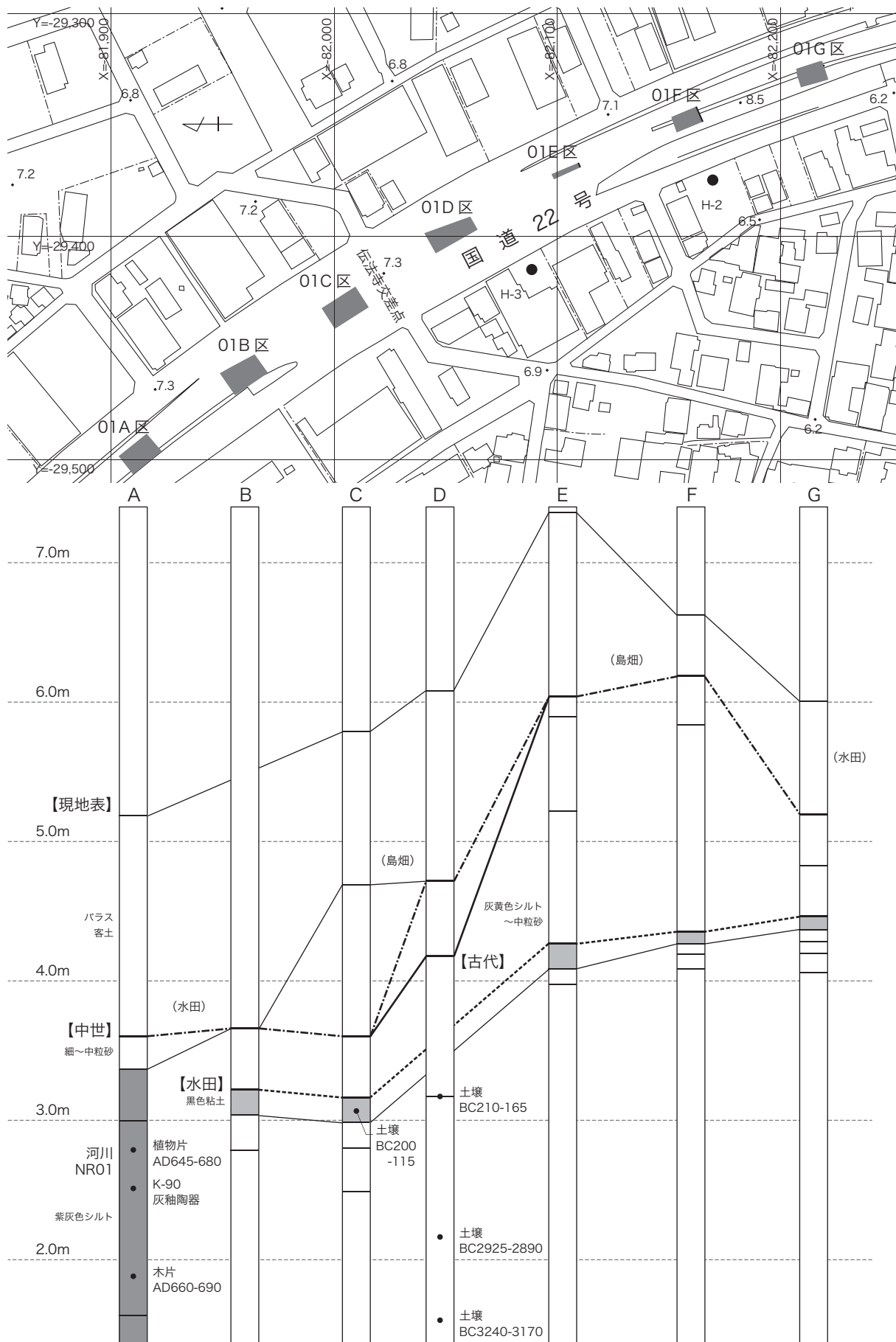
河川

古墳時代水田

各調査区における検出遺構の概要を第62図に示す。近世～近代は、水田と島畑、それに付随する施設によって構成される耕作地が展開する。中世の遺物は各調査区に散見されるが、まとまった遺構群はA区でのみ確認した。古代(奈良時代)の包含層・遺構はD区において特に濃密であった。なお、A・B区において検出された河川は古代を通じて埋積が進行する。黒色粘土層は各調査区において認められるが、諸条件によって、古墳時代と考えられる水田遺構の面的な調査はD・G区に限定された。

	A	B	C	D	E	F	G
近世～近代	SD01・02 ↑		水田・島畑	SD01	(島畑)	(島畑) SD01～03	(水田) SD01～06
中世	SD03 ↑ SK04 ↑ SD05 ↑ 1	SD01・02 ↑		↑			
古代	2 NR01	1 NR01	1	1 SB01・02	1	1	1
古墳時代?			2 水田			2 水田	2 水田

第62図 伝法寺本郷遺跡検出遺構の概要 (左下数字は検出遺構面を示す)



第63図 伝法寺本郷遺跡調査区土層断面柱状図 (縦1:40／横1:2,500)

(1) A区

A区では、旧耕作土直下に堆積する灰白色細粒砂の上面で中世と近世の遺構を検出した(第64図)。なお、灰白色細粒砂は、河川の上部堆積層である。遺構検出面の標高は約3.4mで、検出した遺構は南北に通じる溝群が主体である(第68図)。出土遺物と遺構の重複関係から、SD01、SD02が近世、SD03、SD04、SD05が中世に帰属すると判断した。

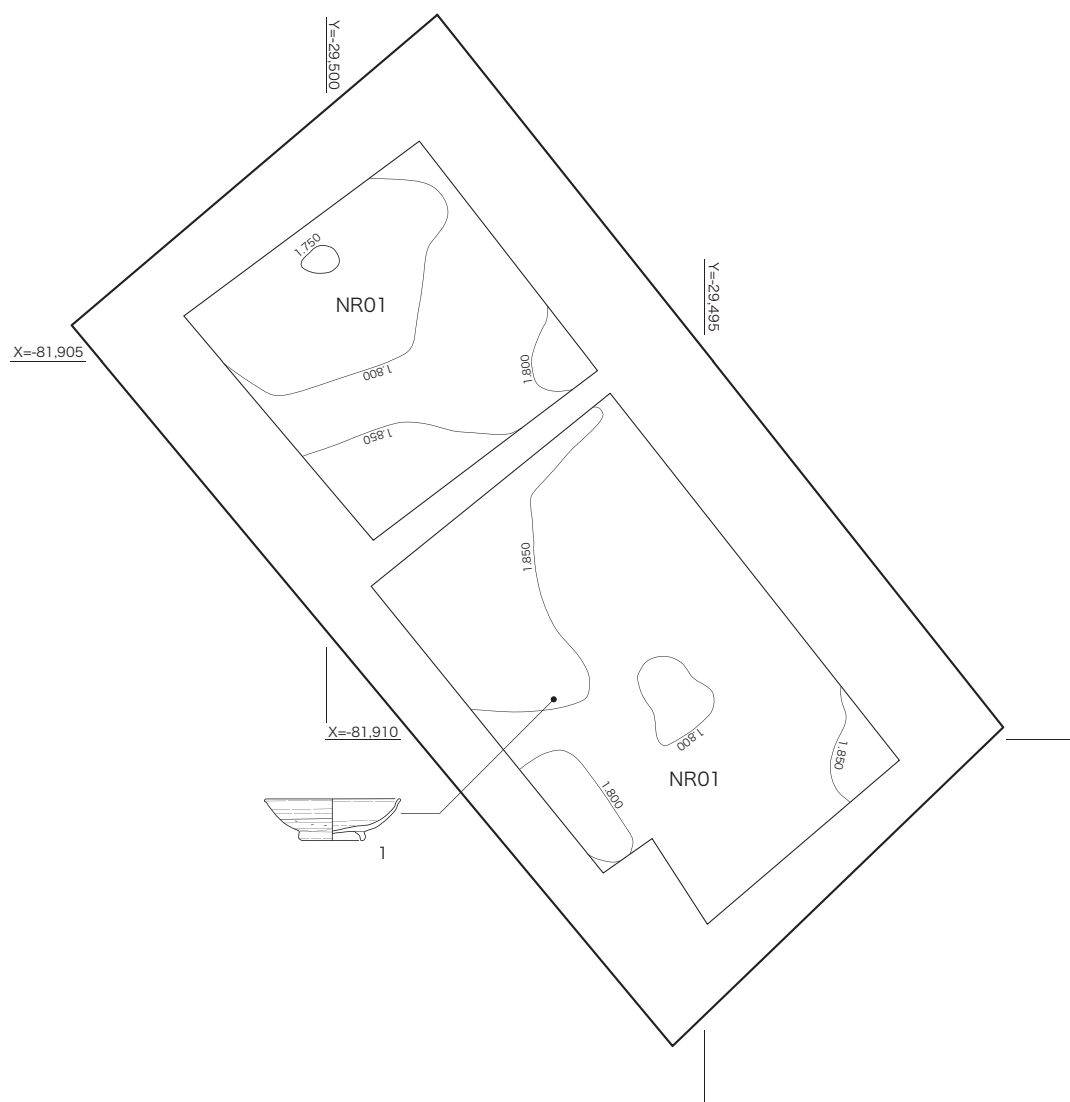
A 区の旧耕作土直下全面は、灰白色細～中粒砂によって覆われ、その下位（標高約 3.0 m 以下）は植物遺体を多く含む紫灰色シルトが堆積する（第 65 図）。紫灰色シルトの堆積は、標高約 1.6 m まで続くことを確認したが、その下位の堆積層の確認は湧水により断念した。

上部の灰白色細～中粒砂、下部の紫灰色シルトは河川内の堆積物と判断され、調査区内ではほぼ水平に堆積していた。遺物の出土はごく限られ、紫灰色シルト層中から黒笹 90 号窯式の灰釉陶器碗（1）が 1 点出土したのみである。2～8 は、中近世の遺構や堆積層に混入した古代の遺物で、7 世紀後半から 9 世紀の各時期の資料が認められる。なお、紫灰色シルト層中に含まれていた植物遺体試料は、645 A D（100%）680 A D、660 A D（82.3%）690 A D の年代値を示した（第 4 章（1）を参照）。

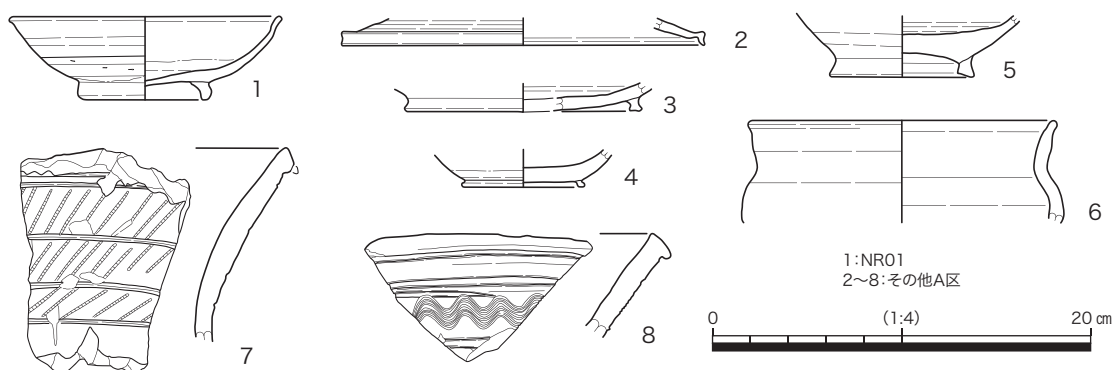
Geological cross-section diagram showing stratigraphic units and their thicknesses. The diagram is divided into three main sections with vertical scale markers on the left and right: L=4.0m (top), L=3.0m (middle), and L=2.0m (bottom). The top section is labeled 'バラス・ガラ' (Basal Gravel). The middle section contains units 1 through 12, with specific labels like 'SD03', 'SD07', and 'SD04'. The bottom section contains units 13 through 29, with labels like 'NR01'. A small inset diagram at the bottom left shows a cross-section of a basin with a central peak and a label '1'. A line connects this label to unit 1 in the main column.

1 5Y4/1 灰色シルト質粘土
2 7.5Y4/1 灰色粘質シルト、10Y8/2 灰白色極細粒砂斑入
3 7.5Y4/1 灰色粘質シルトと 10Y8/2 灰白色極細粒砂の斑土
4 7.5Y7/1 灰白色中砂、7.5Y6/1 灰色シルト混じる
5 5Y4/3 暗オリーブ色シルト、5Y8/2 灰白色極細粒砂斑入
6 5Y4/2 灰オリーブ色シルト
7 5Y5/2 灰オリーブ色シルト、5Y8/2 灰白色極細粒砂斑入
8 5Y4/2 灰オリーブ色粘質シルトと 5Y8/1 灰白色極細粒砂の互層
9 7.5Y5/2 灰オリーブ色シルトと 7.5Y8/1 灰白色極細粒砂の互層
10 5Y5/2 灰オリーブ色極細粒砂、5Y6/1 灰色シルト混じる
11 N3/0 暗灰色粘土と N7/0 灰白色細粒砂の斑土
12 N5/0 灰色粘土と 5Y8/2 灰白色極細粒砂と 5Y4/1 灰色中砂の斑土
13 5Y4/3 暗オリーブ色極細粒砂質シルト
14 5Y7/2 灰白色細粒砂
15 5Y8/1 灰白色中粒砂
16 5Y5/1 灰色シルトと 5Y8/1 灰白色中粒砂の互層
17 5P4/1 暗紫灰色シルト質粘土、5B7/1 明青灰色極細粒砂斑入
18 5RP4/1 暗紫灰色シルト質粘土、炭化物少量混じる
19 7.5Y3/2 オリーブ黒色シルト質粘土、炭化物少量混じる
20 7.5Y4/1 灰色シルト質粘土、植物遺体含む
21 7.5Y3/2 オリーブ黒色シルト質粘土
22 7.5Y4/1 灰色シルト質粘土、(均質)
23 7.5Y4/1 灰色シルト質粘土、植物遺体大量に含む
24 7.5Y4/1 灰色シルト質粘土
25 7.5Y4/2 灰オリーブ色シルト質粘土、植物遺体含む、
下に 5GY8/1 灰白色極細粒砂
26 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色シルト質粘土、下に N7/0 灰白色極細粒砂
27 7.5Y3/1 オリーブ黒色シルト質粘土
28 5RP4/1 暗紫灰色シルトと 5B7/1 明青灰色極細粒砂の互層
29 5Y3/2 オリーブ黒色シルト質粘土、植物遺体大量に含む

III 伝法寺本郷遺跡



第65図 A区下面遺構図 (1:100)



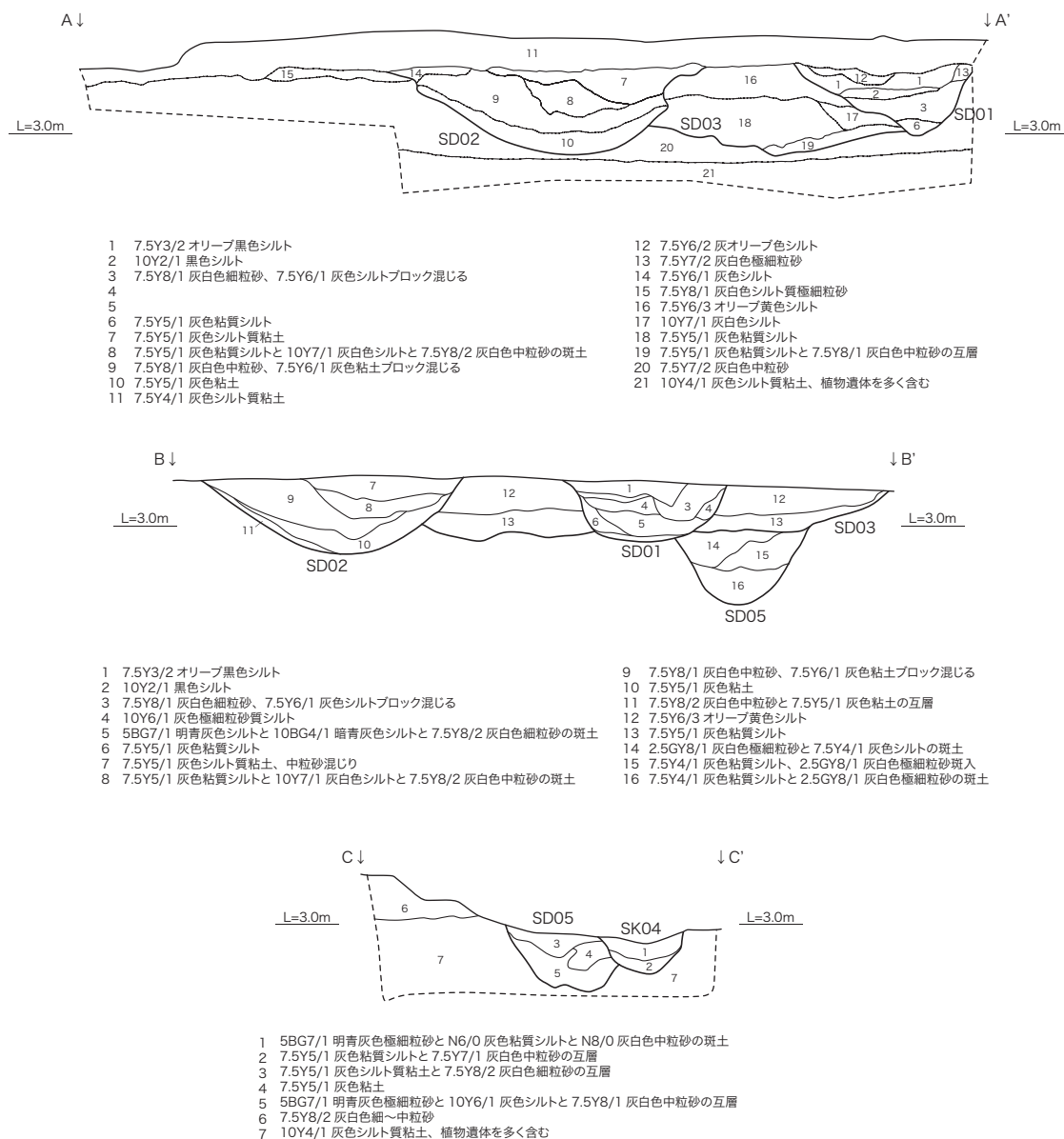
第66図 A区古代出土遺物実測図 (1:4)

SD03

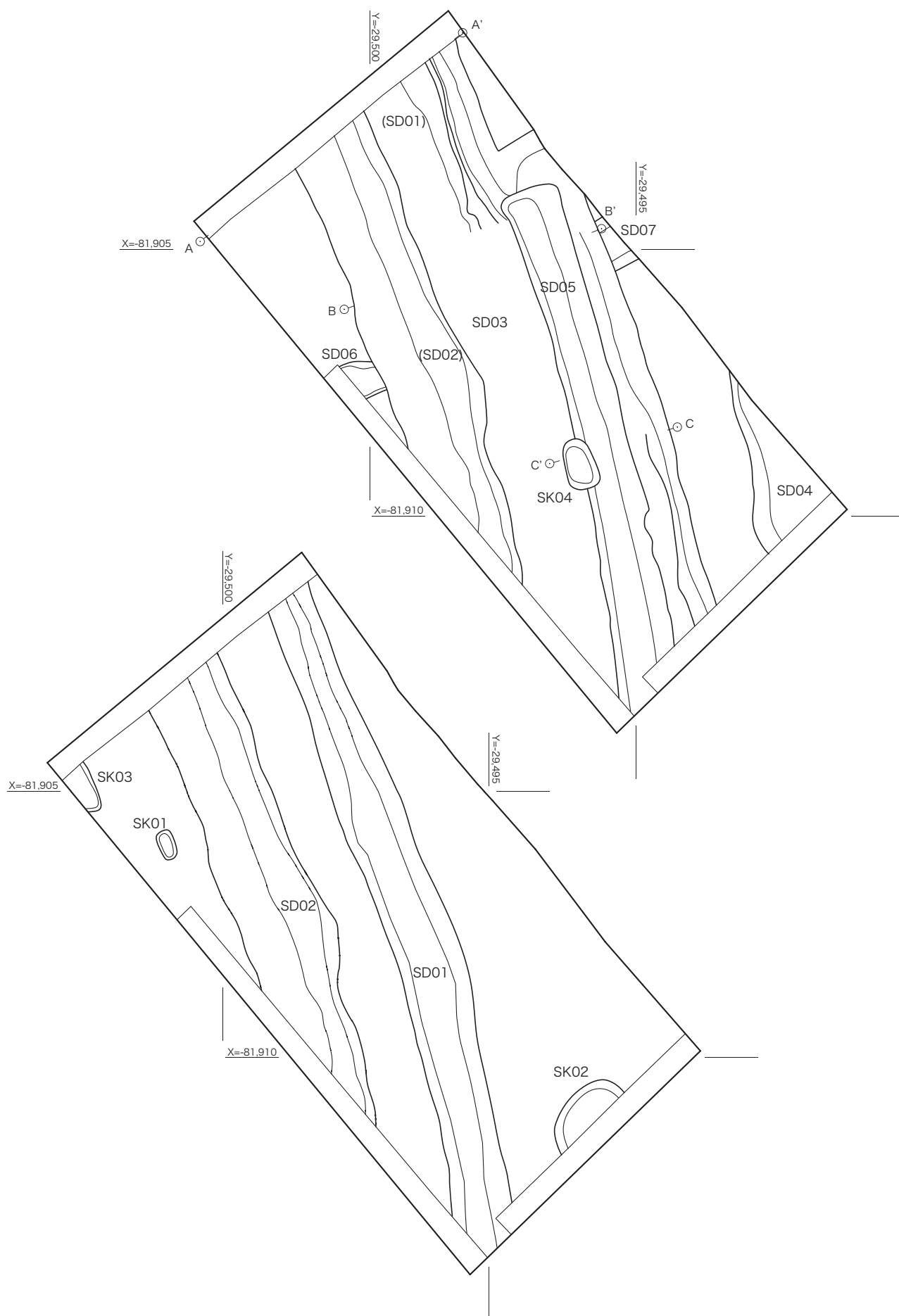
SD03 はSD01 とSD02 によって破壊される部分が多い。溝の規模は不明であるが、幅 4 m 以下で、約 0.6 m までの深さが確認できる。SD03 には東西方向の溝が接続するが、相互の関係について判断する材料は乏しい。溝はシルトによって埋積され、色調変化から、灰黄色を基調とする上層と灰色を基調とする下層に区分した（第 67 図上・中）。

中世の遺物

SD03 の出土遺物は、上層に混入した遺物を除いて、中世に限定される。下層出土遺物（9 ～ 19）、上層出土遺物（20 ～ 28）に区分されるが、上下層において明確な様相差はない。下層出土遺物には、尾張型山茶碗（9）、東濃型山茶碗（10 ～ 14）、猿投（常滑）陶器甕または広口壺（15）、常滑陶器甕（16）、古瀬戸後期の卸皿（17）・筒形香炉（18）・播鉢（19）、上層出土遺物には尾張型山茶碗（20・21）、東濃型山茶碗（22・23）、非クロク調整？土師器皿（24）、常滑陶器小型壺（25）、瀬戸陶器鉢（26・27）がある。これらは、12 世紀後半を上限とし、14 ～ 15 世紀を主体とする時期の遺物群である。



第67図 A区遺構土層断面図（1:50）



第68図 A区上面遺構図 (1:100)



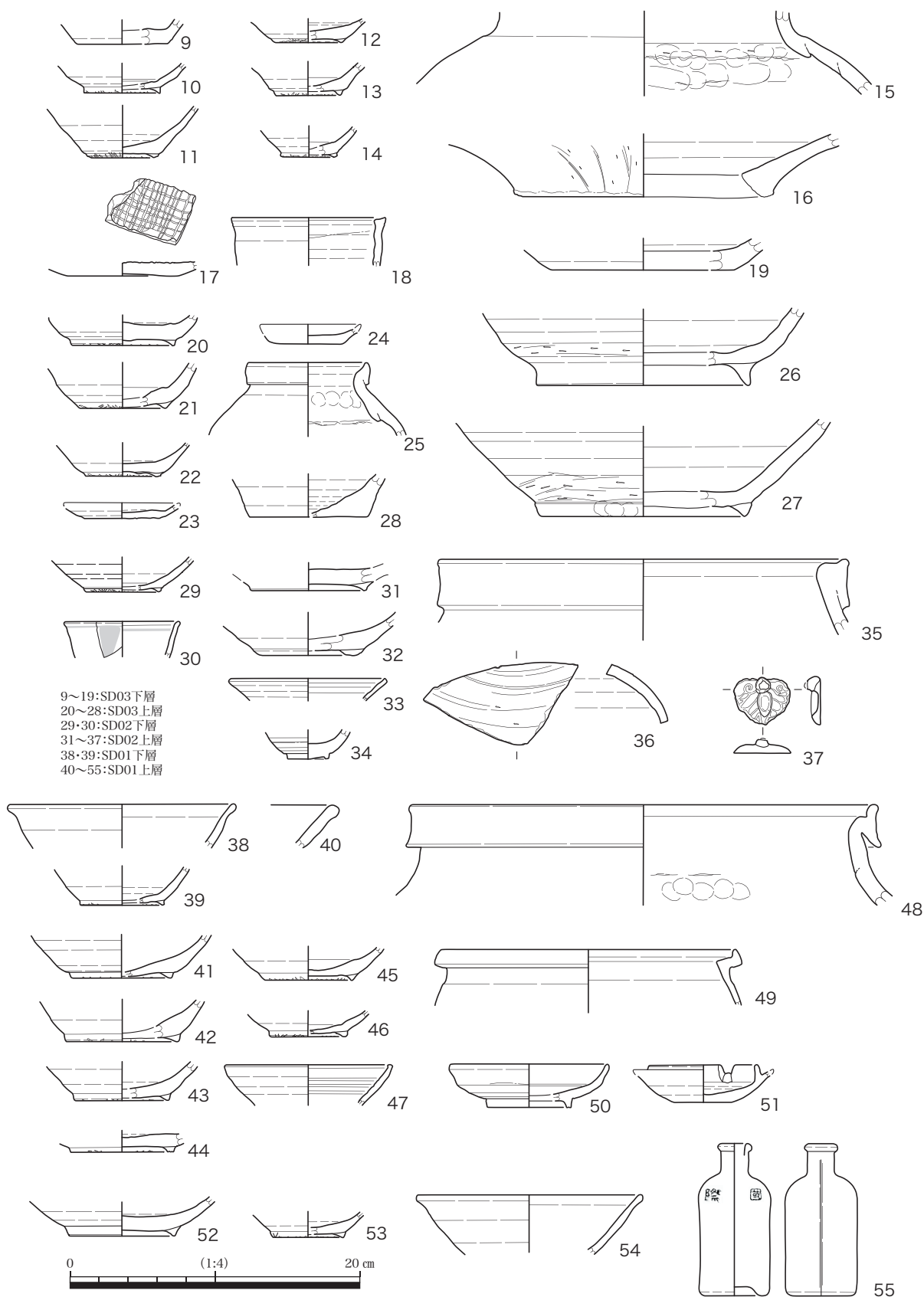
写真23 A区NR01

1：掘削状況 2：遺物出土状況（灰釉陶器碗）



写真24 A区上面遺構

1 : 上面全景 2 : SK04・SD05全景 3 : SK04・SD05土層断面 4 : SD02・01全景 5 : SD02・03・01・05土層断面



第69図 A区中世～近世出土遺物実測図 (1:4)

SD04

SD03 に平行する溝で、わずかにその西岸を検出したのみである。0.4 m前後までの深さを確認した。下層の埋土は灰色粘土と細～中粒砂の斑土で、上層の埋土はシルト～極細粒砂である。SD04 の出土遺物としては、尾張型第4型式の山茶碗（52）を抽出したのみである。

SK04・SD05

SD03 溝底面において検出した。埋土がSD03 とは明らかに異質で、SD03 に先行することは確実と思われる。SK04 は遺構の形状と配置の方向、埋土の特徴から、いわゆる方形土坑と判断される。長軸約 1.0 m、短軸約 0.5 m、残存する深さ約 0.3 m で、小型の部類に属する。埋土は灰～灰白色のシルトと中粒砂の斑土である（第 67 図下）。

SD05 は、灰色粘土と灰白色細～中粒砂の斑土を埋土とする特徴が方形土坑に共通する。しかし、北辺が土坑状に収束する一方で、溝状に 10 m 以上通じ、調査区南壁に達する特異な形状を呈する。

方形土坑

SK04・SD05 とも明確な出土遺物は抽出されなかったが、SD03 に先行すること、下層の埋土が近似する SD04 において尾張型第4型式の山茶碗が出土していることから、12 世紀に帰属する可能性を示しておく。

SD02・01

平行して南北に通じる2条の溝で、SD03 に重複して掘削される（第 67 図上・中）。幅は SD02 が約 2.0 m、SD01 が約 1.2 m で、深さは SD02、SD01 とも 0.5 m 前後が残存する。両者は、灰色を基調としたシルトを埋土とすることからも一連の溝と考えられる。中世の遺物が多いが、それらは重複する SD03 から混入した遺物であると考えられる。SD02 の瀬戸美濃陶器小碗（34）、SD01 の瀬戸美濃陶器丸皿（50）、瀬戸美濃陶器灯明皿（51）などの出土遺物から、遺構は 18～19 世紀に掘削され、SD01 上層からガラス瓶（55）が出土していることから、最終的な埋没は近代以降、国道敷設時の直前であったと推定される。

近世～近代

金属製品生産関連遺物

金属製品生産関連遺物として鉄滓、砥石各1点を抽出した（第 70 図）。鉄滓（56）は小型で、溶解したガラス質や細礫が固着化したいわゆる再結合滓。比重は小さく、構造的特徴に乏しい。SD01 上層出土で中世以降に帰属する。砥石（57）は仕上げ砥で、石材は泥質凝灰岩である。使用面が2面確認できる。SD03 上層出土で、中世に帰属する。

鉄滓

砥石



第70図 A区出土金属製品生産関連遺物実測図（1:2）

(2) B区

層序と検出遺構

B区は国道敷設時に標高約3.2mまでが削剥され、旧耕作土もほとんど残存していなかった(第71図)。客土直下は、A区と同様に河川堆積物である細～中粒砂が調査区全面を被覆し、細～中粒砂上面において中近世の遺構を検出した(第73図)。

NR01

黒色粘土層

B区の客土直下は、細～中粒砂によって全面が覆われていた。この堆積層はA区と同様、河川内の堆積物であると判断される。また、B区南東端では、黒色粘土層とそれを被覆する灰色シルト層が河川活動によってすでに流出していることを確認した。この事実から、B区が南流する河川の南岸付近に相当することが判明した。なお、黒色粘土層の上面は標高約3.2mで、C区の黒色粘土層にほぼ対応する。細～中粒砂の堆積は、標高約2.8mまで続くことを確認したが、その下位の堆積層の掘削は壁面崩落の危険から断念した。

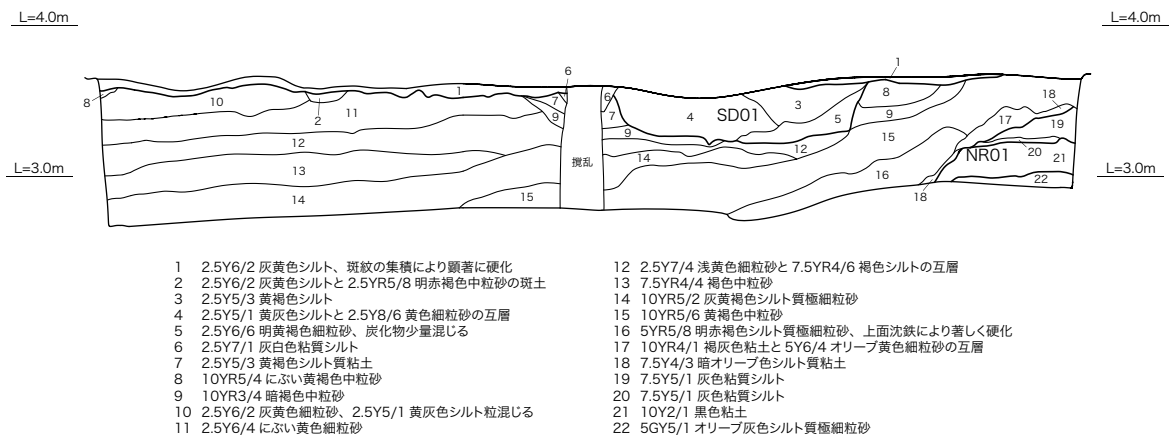
須恵器把手付鉢

遺物の出土はごく限られ、細～中粒砂層中から、須恵器把手付鉢(58)が1点出土したのみである。把手付鉢はやや独特な器形であるが、胎土は猿投窯産の須恵器に共通する。8世紀後半を前後するものと考えられる。

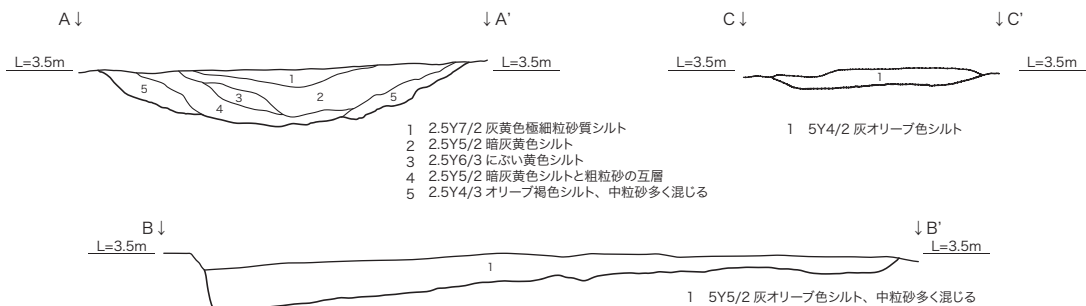
SD01・02

中世後期

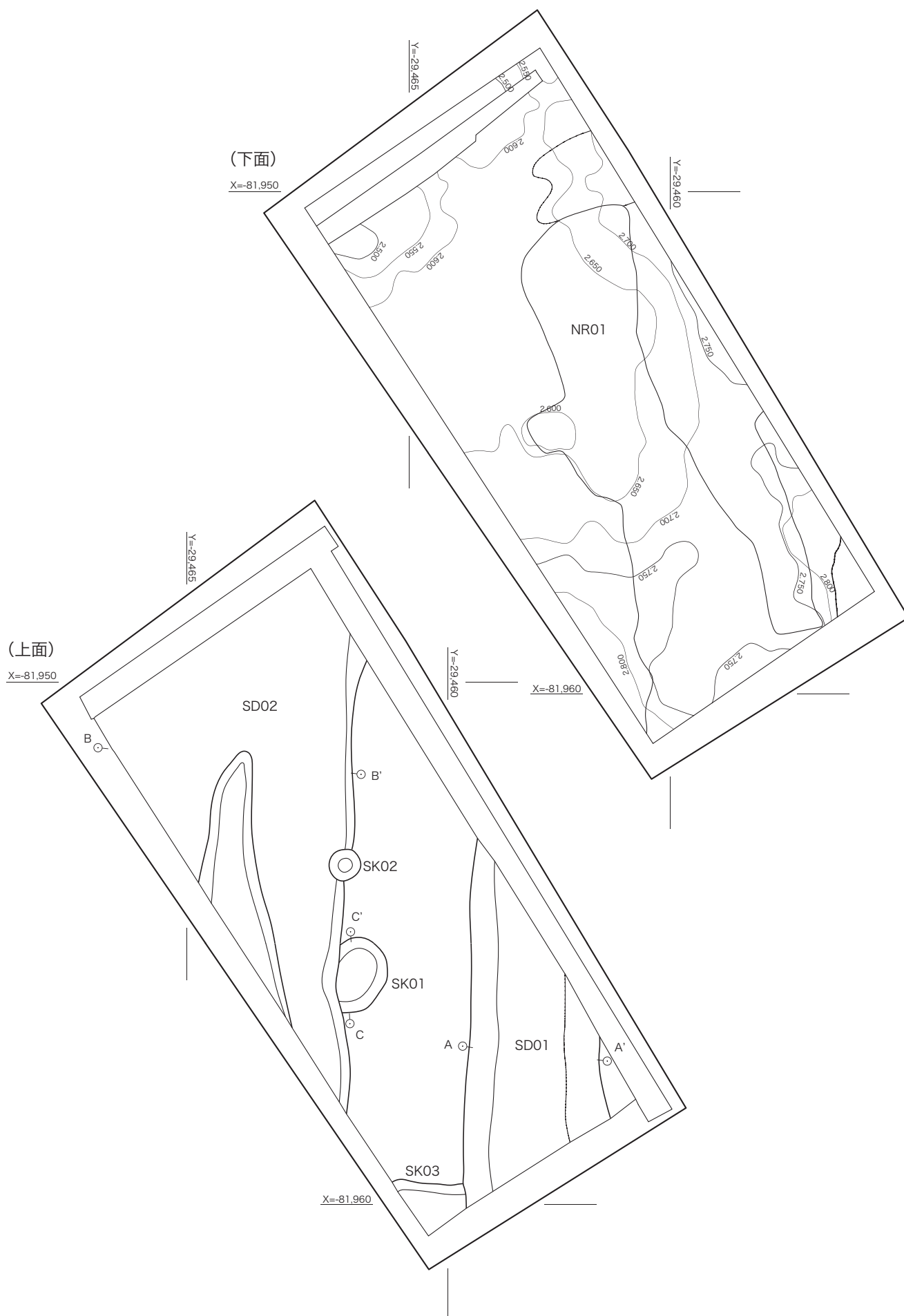
南北に通じる溝で、細～中粒砂上面において検出した。溝の周囲で検出した土坑も含めて、削剥が著しい。いずれの遺構も灰色を基調としたシルトによって埋積される(第72図)。出土遺物は出土しなかったが、遺構検出面付近において中世後期の遺物(59・60)がわずかに認められたことから、遺構の帰属時期は14～15世紀と推定される。



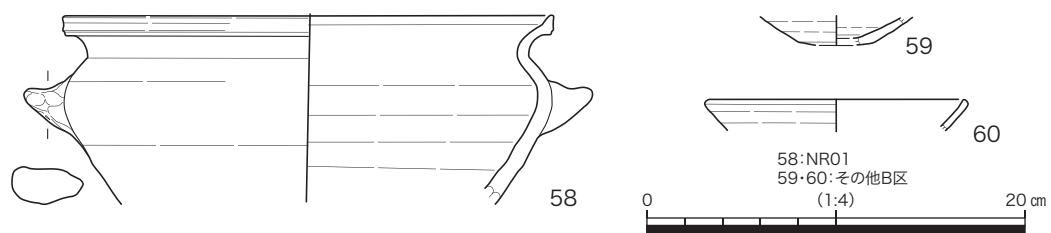
第71図 B区東壁土層断面図(縦1:50/横1:100)



第72図 B区遺構土層断面図(1:50)



第73図 B区遺構図 (1:100)



第74図 B区出土遺物実測図 (1:4)



写真25 B区NR01／上面遺構

1：NR01検出状況 2：上面全景 3：東壁（NR01）土層断面 4：北壁（NR01）土層断面

(3) C区

C区は、標高 4.5 m 付近まで客土が堆積し、客土以下、灰色を基調としたシルト、細粒砂、粗粒砂が連続して堆積する（第 75 図）。客土下位は国道敷設前の耕作地で、古代以降の遺構は検出されなかったが、黒色粘土層上位で古墳時代と推定される水田を検出した。

C区下面

標高 3.2 m、黒色粘土層上位において小区画水田を検出した（第 76 図上）。水田を被覆する層は上位から、灰白色極細粒砂質シルト層（被覆土 1）、灰色シルト層（被覆土 2）、灰色粘土層（被覆土 3）の層準で堆積する（上位から下位にかけて堆積物が細粒となる）。なお、被覆土中には上面の水田に起因する管状斑文が集積する。水田は灰色シルト層中において、黒色粘土層の畦畔状の起伏を識別することによって検出を試みたが、畦畔状の起伏は、土壌の流出、圧密化によって、土層断面においてもわずかに識別できる程度であった。

水田は、灰色粘土層を耕作土、灰色粘土層下位の黒色粘土層を不透水層とすると理解される。耕作土の大部分はすでに流出していたが、攪拌によって塊状に砕かれた状況が観察された。不透水層である黒色粘土層の下位には灰白色シルト質粘土、黒色粘土が堆積する。黒色粘土層中には斑状のやや淡い斑文が確認されるが、東壁の土層断面の観察において、C区北半に斑文の集積がかなり濃密な部分を確認した。なお、水田土壌については、プラント・オパール定性分析を実施したが、ウシクサ属（ススキ属を含む）・ヨシ属・燃烧炭微粒子が検出されたのみで、イネ属は検出されなかった。

水田が帰属する時期は、黒色粘土層中から土師器の碎片がわずかに出土するのみであったので、明確には決定できないが、黒色粘土層中において口縁部先端を折り返した土師器壺（61）が出土したこと、B区において水田相当層が古代の堆積層によって削られていることを根拠として、古墳時代である可能性を指摘しておきたい。

C区上面

客土以下の堆積環境は概して不安定であるものの、やや高燥で酸化状態に近かったと考

層序と検出遺構

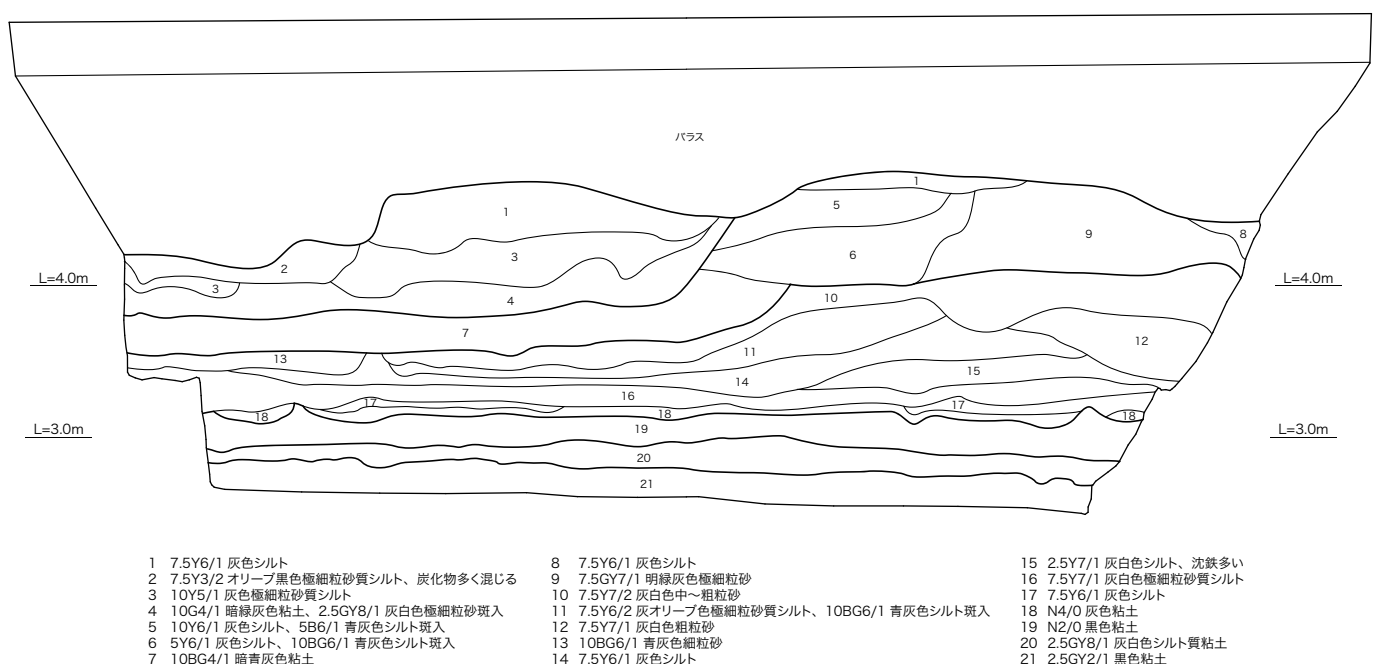
小区画水田

耕作土と不透水層

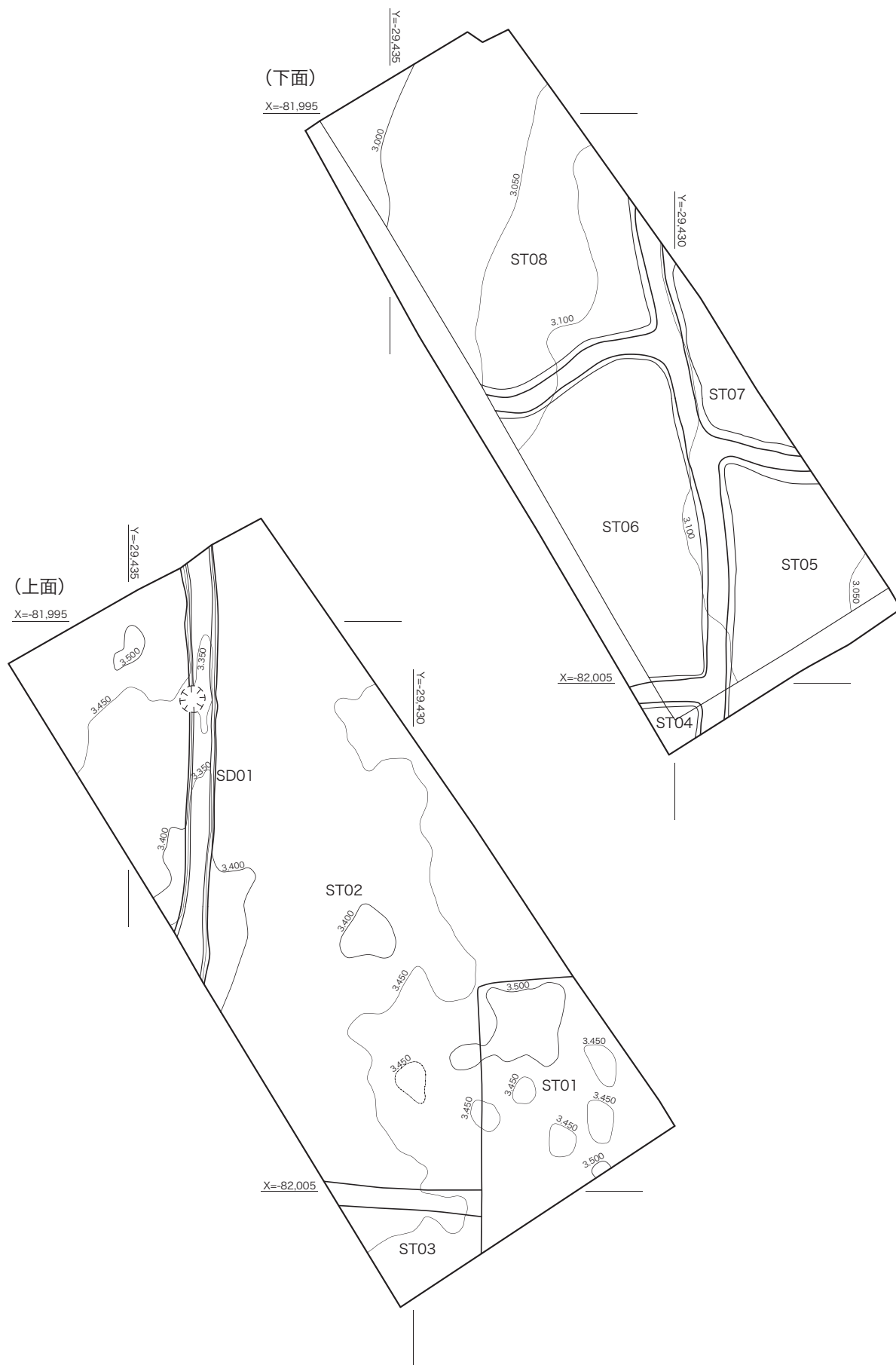
プラント・オパール定性分析

出土遺物

水田と島畑



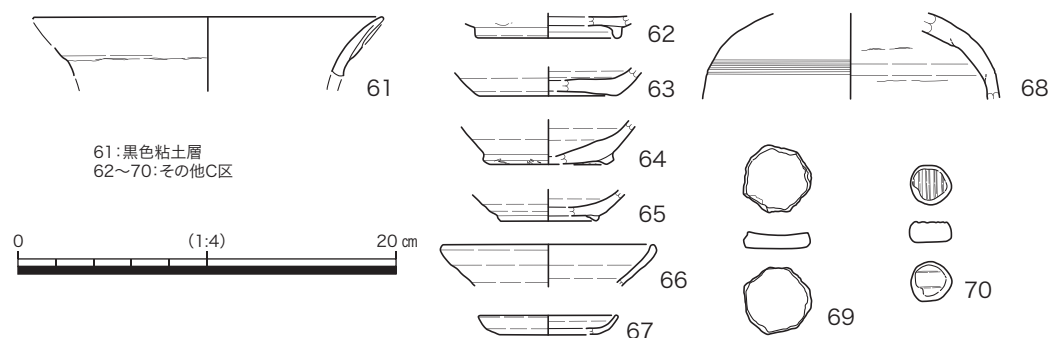
第75図 C区東壁土層断面図（縦1:50／横1:100）



第76図 C区遺構図 (1:100)

えられる調査区南東端付近と、低湿で還元状態にあった南東端以外の部分に区別して理解することが可能である。低湿な部分は水田、高燥な部分は島畑として利用されていたことを確認したが、それ以外の遺構は近世～近代の溝 SD01 を除いて確認されなかった（第76図下）。出土遺物も少なく、旧耕作土中などから灰釉陶器碗（62）、13～15世紀の各型式の山茶碗（63～67）、古瀬戸前IV期の梅瓶（68）などが抽出されたのみである。水田と島畑は中世の堆積層を利用していることから、15世紀以降、SD01 以前に形成されたと考えられる。

島畑形成時期



第77図 C区出土遺物実測図 (1:4)

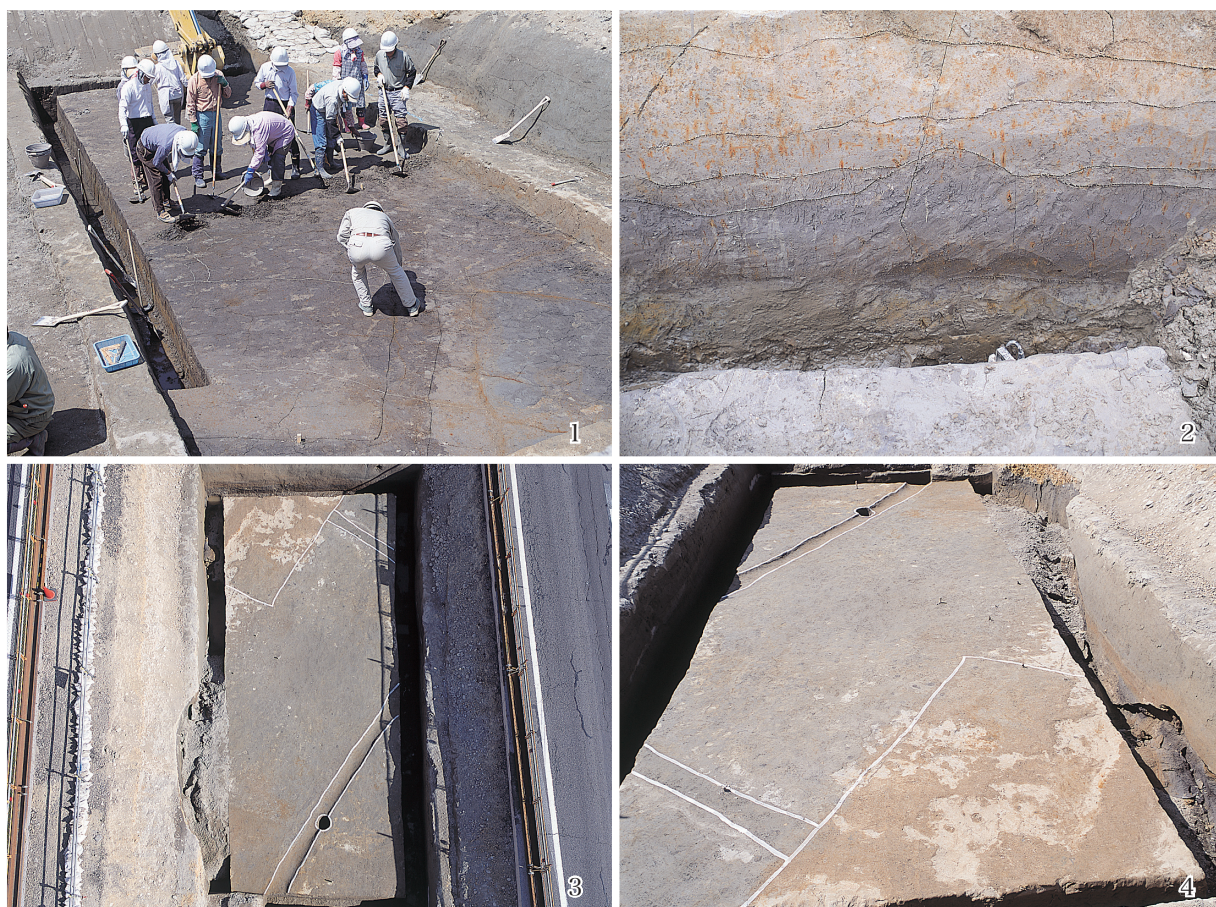


写真26 C区下面／上面遺構

1：小区画水田検出状況 2：畦畔の土層断面 3・4：上面検出状況

(4) D区

層序と検出遺構

D区は標高約4.3mまで客土が盛られ、客土直下は、旧島畠に相当する調査区北半に古代の遺物包含層、旧水田に相当する調査区南半に旧耕作土が堆積する。なお、調査区中央付近の攪乱坑(土管理設溝)を介して生じている堆積の不整合は、国道敷設時に生じた沈降、圧密化に起因する可能性が高い。

古代の遺物包含層は灰色を基調とするシルトで、炭化物や焼土粒が多く混入していた。層位変化は玄妙で、包含層掘削中に層中で検出された遺構もあるが、明確な生活面の認定までには及ばなかった。結果、多くの遺構は、層理面上(黄褐色シルト層上面)において検出した(第78・79図)。

古代の遺構検出面の下位には黄褐～灰黄色を基調としたシルトと細～中粒砂が交互に堆積するが、総じて層相は変化に乏しい。下面の水田検出を意図しつつ、C区において黒色粘土層の上面を確認した標高約3.2mまで掘削を継続したが、黒色粘土層の有無は確認できず、激しい湧水のため、より下位の層位の確認は断念した。

SB01

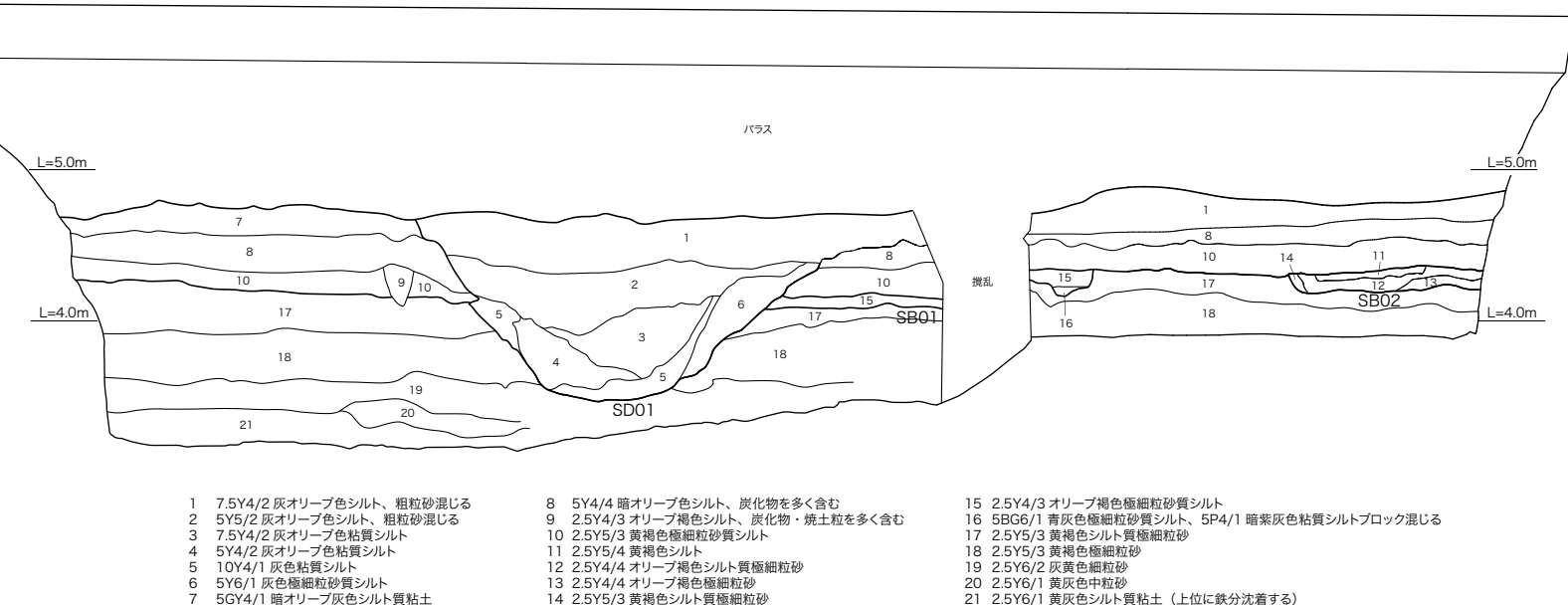
調査区のほぼ中央で検出した竪穴住居である(第80図)。北辺がSD01によって失われ、東辺が調査区外にあるので、規模と竈の有無については明らかでない。検出時には土壌が不安定で、遺構の検出、掘削にはやや難があった。住居床面で9基の小土坑(SK03～SK11)を確認したが、支柱穴に相当する小土坑は明確でない。帰属時期は、SK05において出土した小型の土師器濃尾型甕(74)などから、8世紀後半と考えられる。濃尾型甕の底部外面には木葉痕に似せた線刻がある。

濃尾型甕

SB02

検出状況

調査区南半において検出した竪穴住居で、北西部分を検出したのみである(第81図)。埋土の識別は困難であったが、竈周囲に分布する炭化物粒、遺物の散布範囲を参考として、西辺に竈を付設する竪穴住居として検出した。住居床面では、竈に併設された貯蔵穴様の



第78図 D区東壁土層断面図(縦1:50/横1:100)

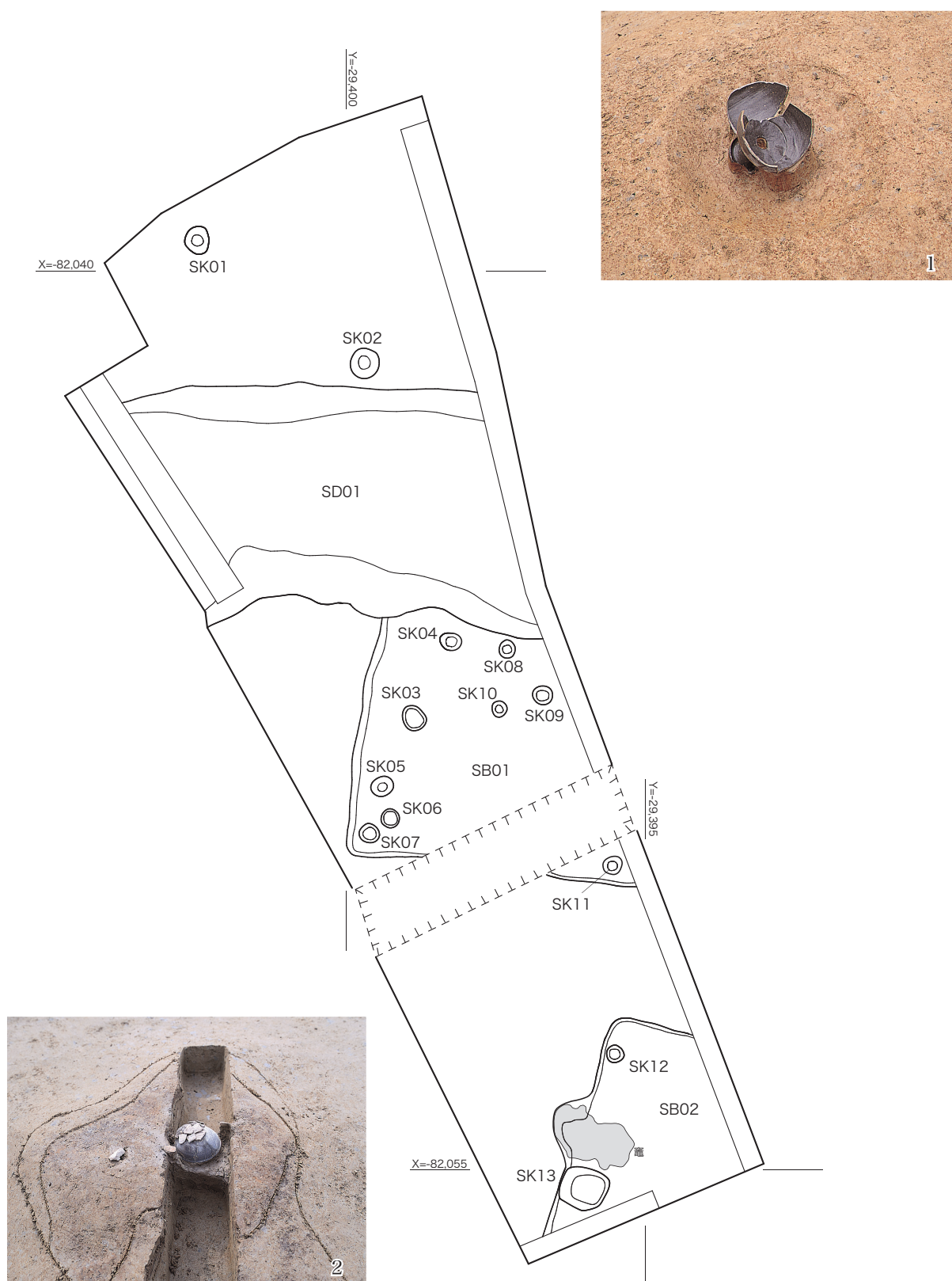


写真27 D区遺物出土状況

1 : SK02遺物出土状況

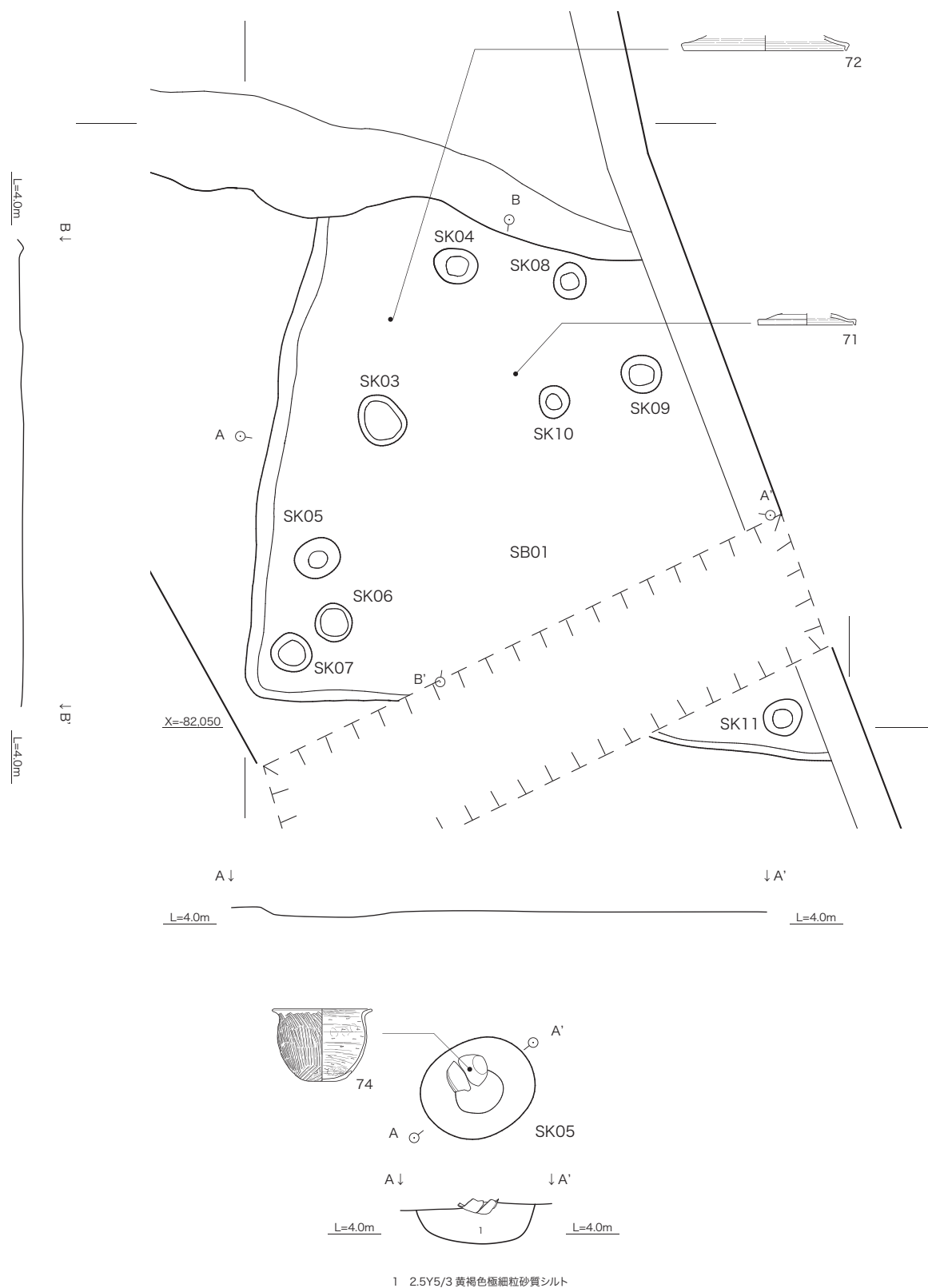
2 : SB02竈内遺物出土状況

第79図 D区遺構図 (1:100)

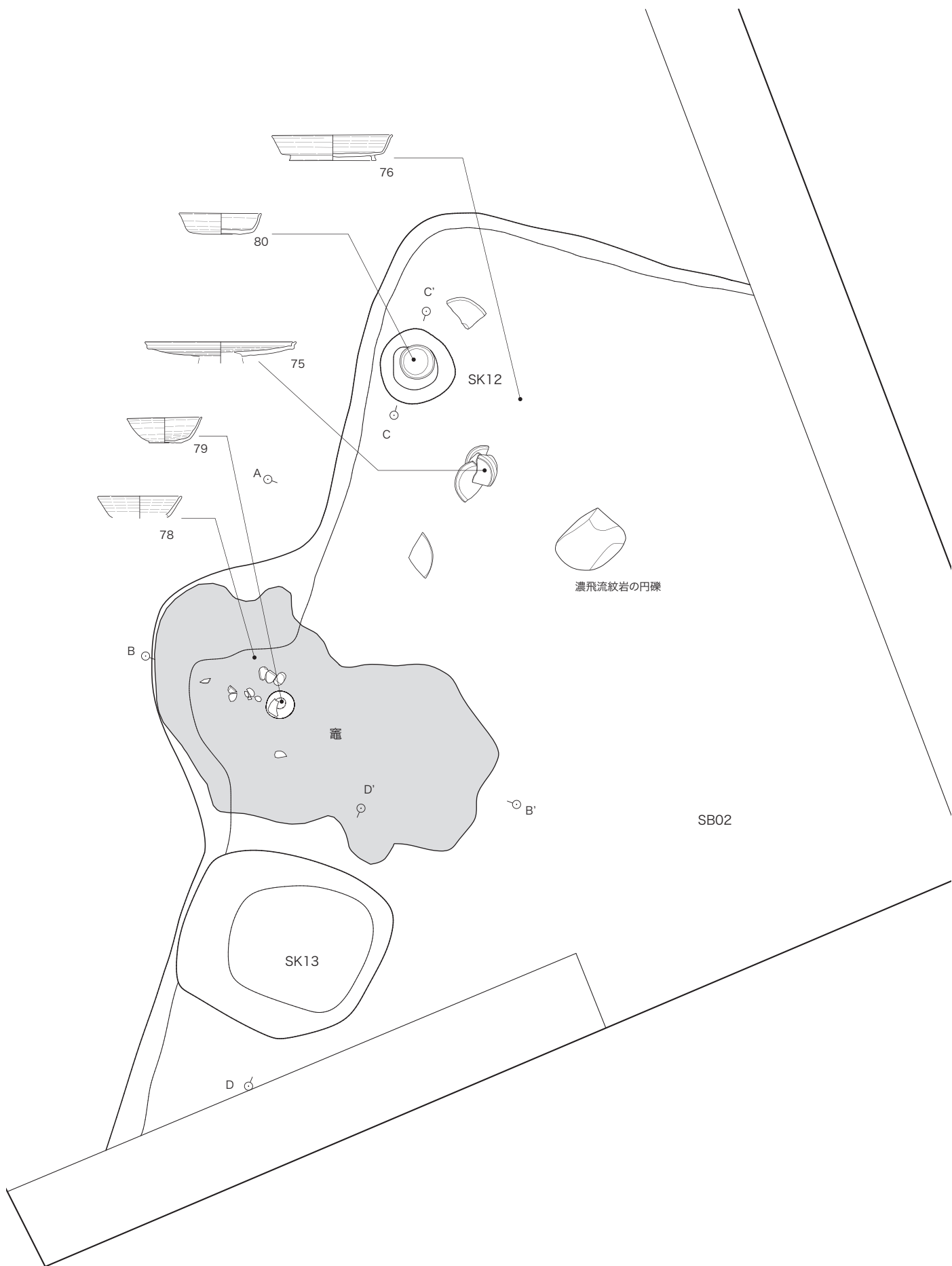


写真28 D区古代遺構

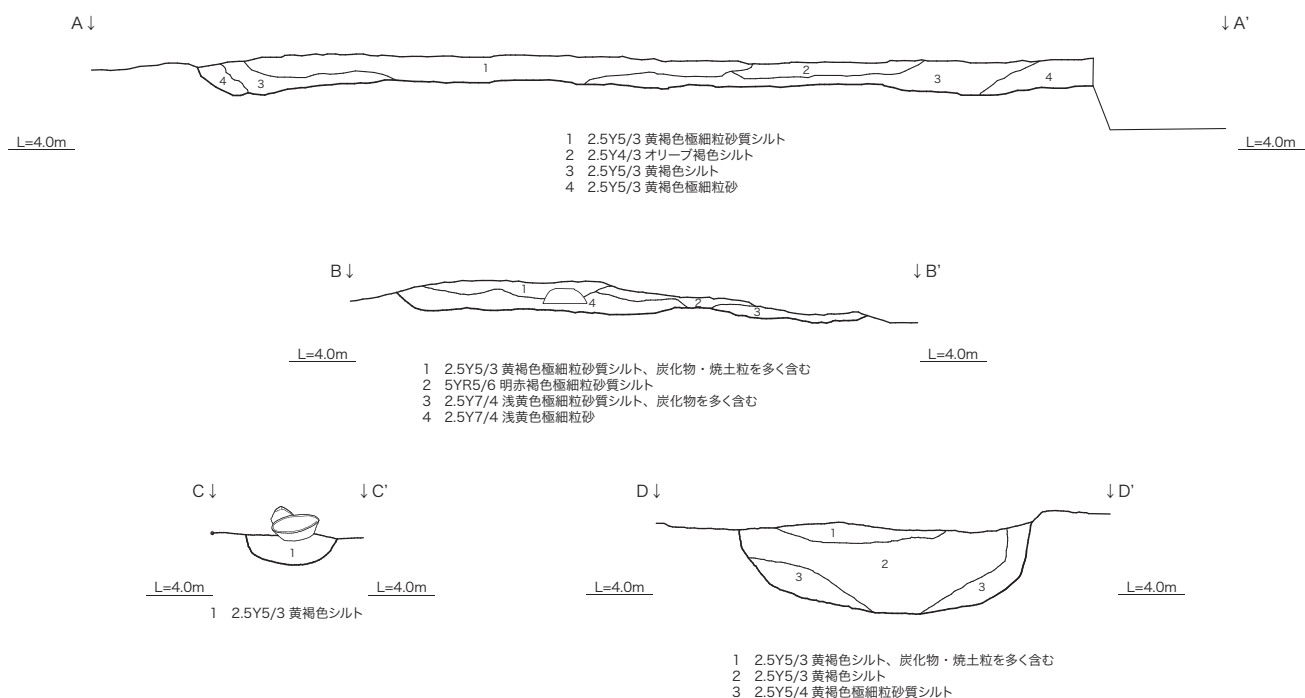
1 : D区全景 2 : SB01・02全景 3 : SK02土層断面 4 : SB02竈検出状況 5 : SB02竈土層断面



第80図 D区SB01遺構図・遺物出土状態図 (1:50/1:20) ・



第81図 D区SB02遺物出土状態図 (1:20)



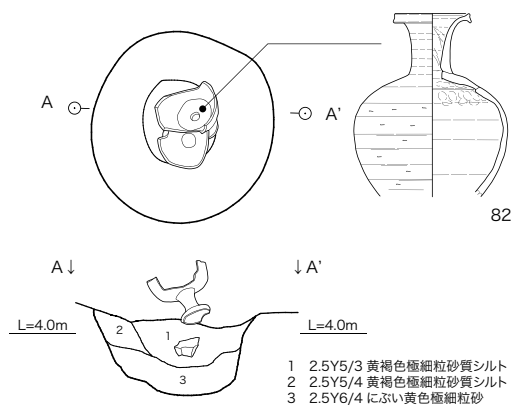
第82図 D区SB02土層断面図 (1:20)

方形の土坑 SK13 と小土坑 SK12 を検出した。床面には竈の周囲に竈から掻き出した炭と灰が広がり、さらにその周囲には台石と思われる濃飛流紋岩の円礫、須恵器脚付盤 (75) などが散乱していた。また、小土坑付近には完形の須恵器無台杯 (80) が残されていた。

竈は壁体の崩壊と流出が顕著で、遺存状況は良好でなかったが、壁内には須恵器無台碗 (79) が伏せられていた (第 81・82 図)。無台碗は被熱していないことから、支脚として転用されたものではなく、竈の廃絶時に意図的に伏せ置かれたものであろう。無台碗は底部外面に回転糸切痕を残す。脚付盤、有台杯、無台杯、無台碗による器種の構成は、折戸 10 号窯式の典型的な組成である。帰属時期は、出土遺物から 8 世紀後半と考えられる。

SK02

調査区北半の包含層中で検出した土坑である (第 83 図)。須恵器長頸瓶 (82) がほぼ逆位で出土したが、埋納を断言するまでには及ばなかった。長頸瓶は頸部中位を搾る形態で、頸部と体部の接合は三段構成である。折戸 10 号窯式に相当する。



第83図 D区SK02遺構図 (1:20)

包含層出土遺物

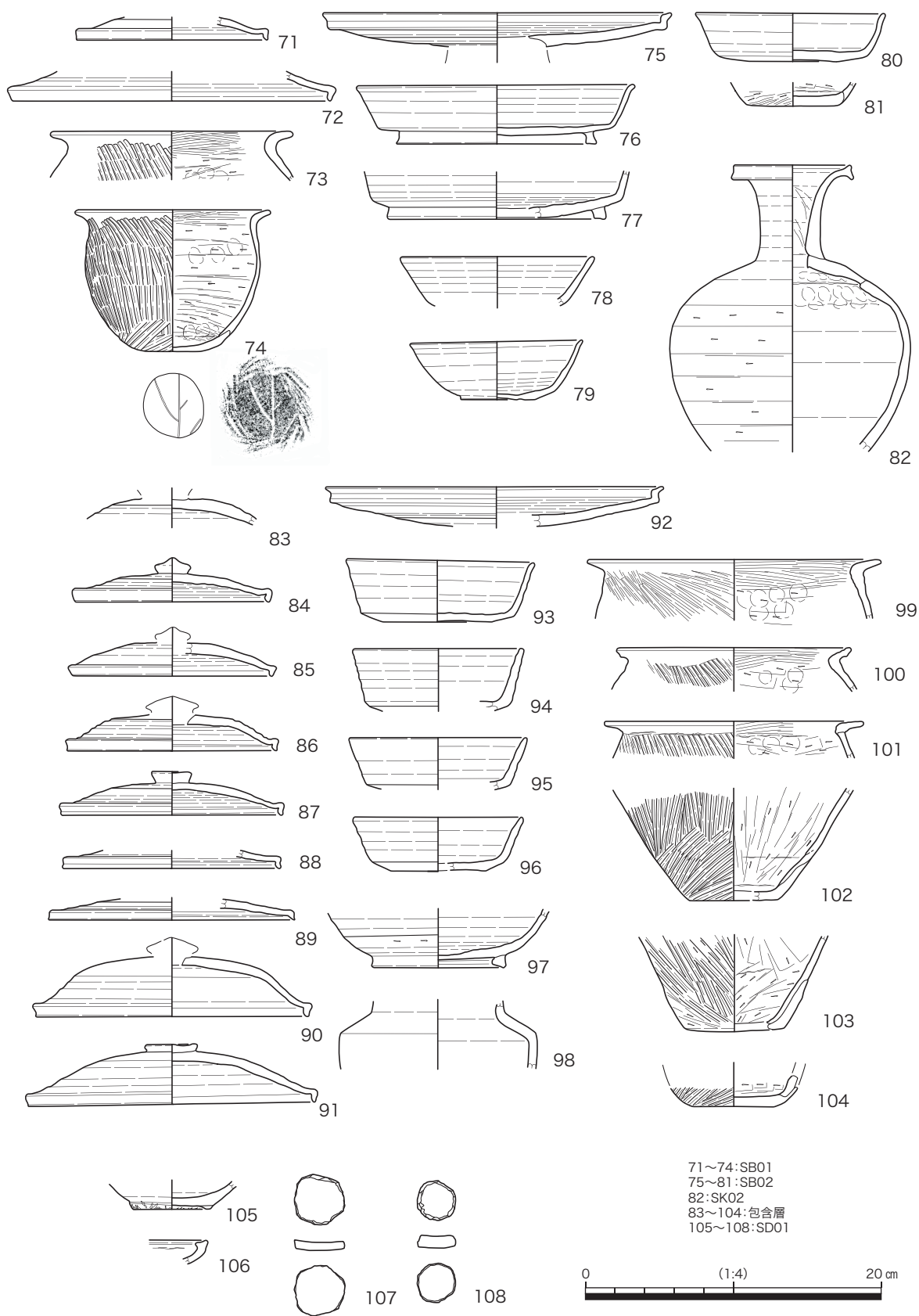
83～104 は包含層において出土した古代の土器である。須恵器として摘み蓋 (83～91)、無台盤 (92)、無台杯 (93～96)、有台碗 (97)、短頸壺 (98)、土師器として濃尾型甕 (99～104) がある。須恵器は、口径 13～15cm の摘み蓋と口径 11～13cm のやや小型の無台杯が主体の一群で、およそ折戸 10 号窯式に帰属する。

竈

出土遺物の構成

須恵器長頸瓶

折戸10号窯式



第84図 D区出土遺物実測図 (1:4)

SD01

旧島畑と旧水田を画する溝であったと考えられる。遺物の出土は少なく、19世紀後葉を前後する近世の遺物（106～108）がわずかに認められたのみであった。灰色を基調としたシルトを埋土とし、近代以降の水田化により完全に埋没したとみられる。

島畑と水田

金属製品生産関連遺物

D区の遺物包含層において、金属製品生産関連遺物のややまとまった出土をみた（第86図）。共伴する土器（83～104）から、8世紀後半を中心とする時期が与えられる。資料体は、鑄羽口、鑄型、砥石によって構成される。これらは時期と組成が一定程度明らかな好資料として評価される。

時期

鑄羽口は、薄手で内径が大きい一群（A類、109～111）と厚手で内径が小さい一群（B類、112・113）がある。A類は15片・192.6gが出土し、基部が残る3点を図示した。109は基部で、基部端面は平坦である。基部付近で外径10.8cm、内径8.6cmに復原され、先端に向かって径がやや小さくなる形状が想定される。輪積み成形で、内外面、基部端面の調整はいずれもやや曖昧である。基部側の色調は暗褐色で、先端に近い部分は色調が黄橙色に変化する。なお、接合しない破片に、明橙色に色調が変化した部分が認められる。110は109と同一個体の可能性があるが、基部の断面形状がやや不整な円形となる。111は緻密な胎土で、109・110とは明らかに異なる。B類は2点を図示した。112は先端の部分で、外径7.0cm、内径2.7cmに復原できる。先端の面の溶解は弱く多孔質で、先端から基部に向かって色調が灰色から淡黄色に変化する。胎土は精良で砂粒を含まない。27.6g。113は砂粒を多く含む胎土で、外面の色調が灰色に変化する。9.5g。

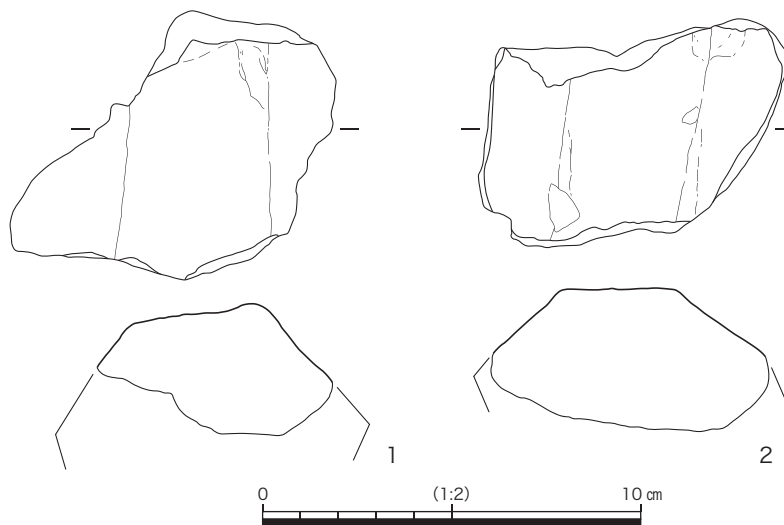
鑄羽口

114は成形による平滑面が3面確認される土製品で、多角柱状の形状が想定できる。胎土は精良で砂粒を含まない。これらの特徴から鑄型（内型）の破片と推定した。同一層位からは、接合しない破片が他に12片・157.1gが出土している。同様な例は、一宮市八王子遺跡、本書で報告する中之郷北遺跡Ⅰ区においても認められる。砥石は2点出土した。115は使用面が1面、116は使用面が2面残存する。石材は115が凝灰質砂岩、116が砂岩で、いずれも仕上げ砥である。

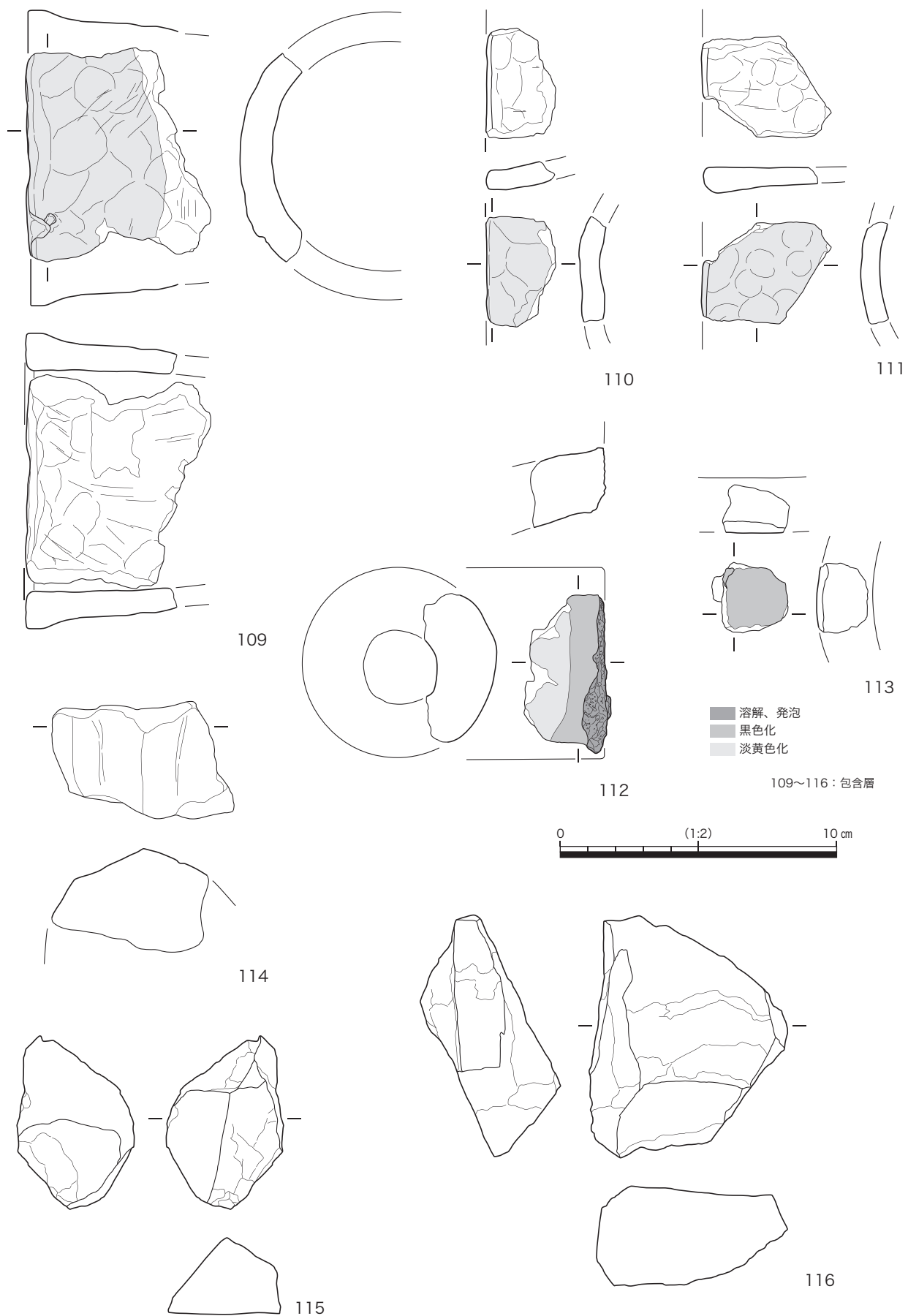
鑄型（内型）

八王子遺跡

中之郷北遺跡Ⅰ区



第85図 八王子遺跡出土鑄型（内型）実測図（1:2）



第86図 D区出土金属製品生産関連遺物実測図 (1:2)

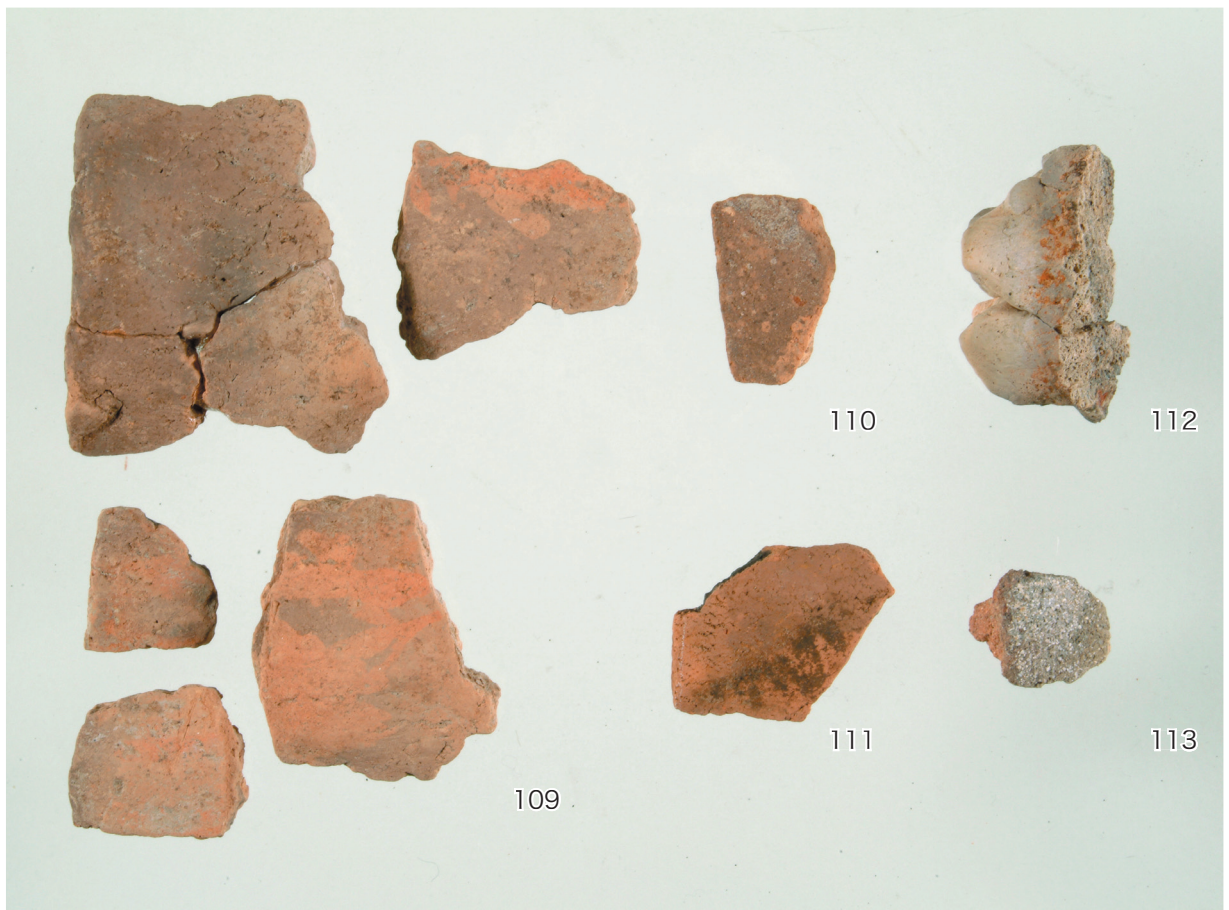


写真29 D区出土金属製品生産関連遺物

(5) E区

層序と検出遺構

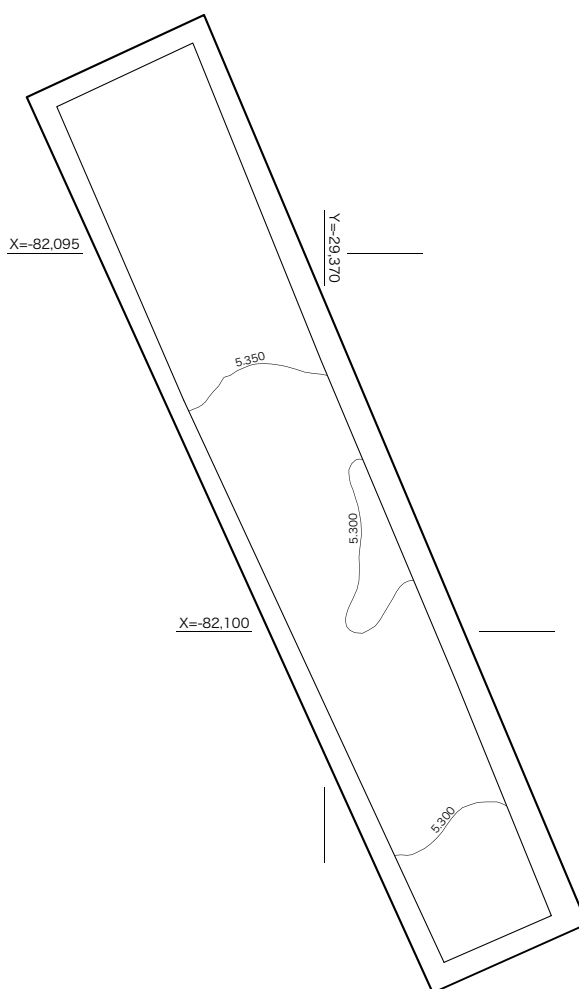
E区は標高約6.0m前後までが客土と旧耕作土の堆積である(第88図)。旧耕作土除去後、灰白色シルト層、灰黄色シルト層を掘削、精査したが、遺構は検出されず、標高約5.3mの灰黄色中粒砂の層理面上を上面の遺構検出面とした(第87図)。

黒色粘土層

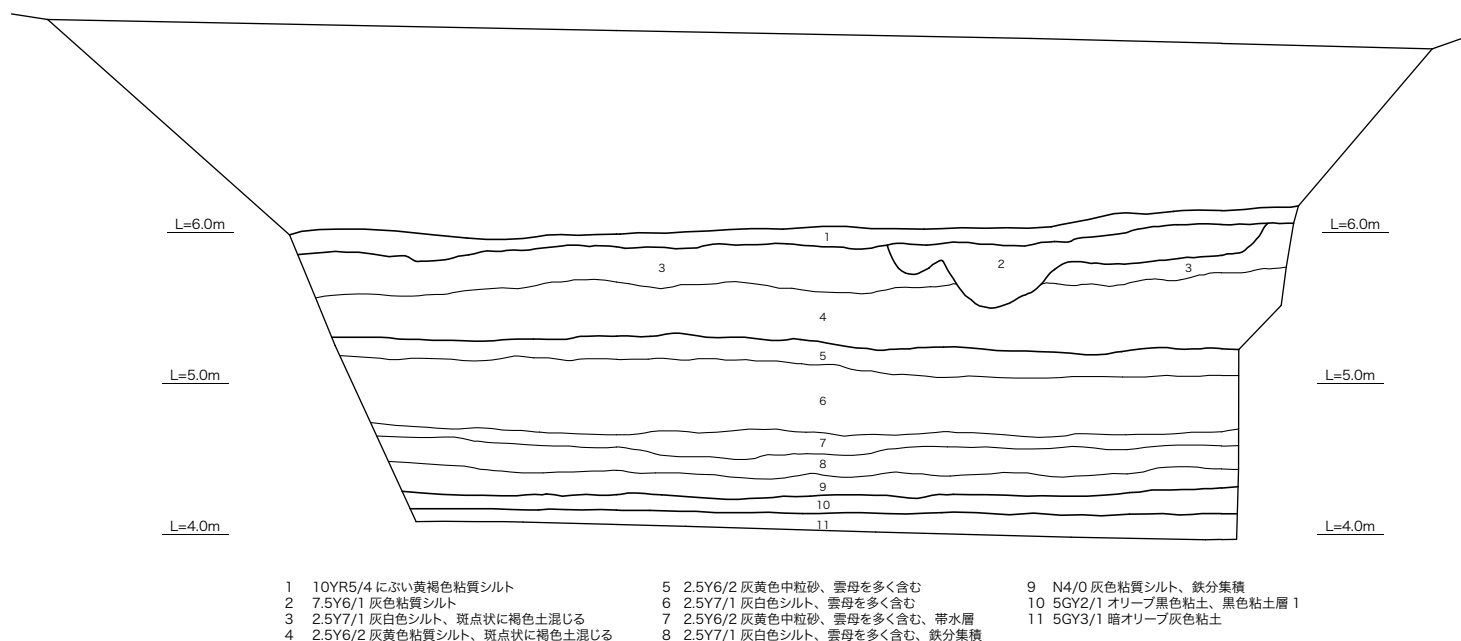
灰黄色中粒砂以下は、灰白色シルト、灰黄色中粒砂、灰白色シルト、灰色粘質シルト、黒色粘土、灰色粘土が堆積する。黒色粘土層の上面の標高は約4.3mで、C区と比較して約1.1m高い。灰白色シルト層・灰黄色中粒砂層・灰白色シルト層がC区における被覆土1・2に、灰色粘質シルト層が被覆土3(水田耕作土)に対応し、黒色粘土層がC区と同様、水田面下位の不透水層であると考えられるが、調査区が狭小なこともあって、明確な畦畔は検出されなかった。

出土遺物

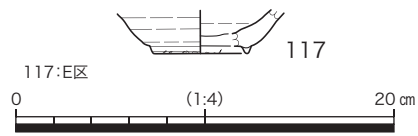
遺物は、上面遺構の検出過程で出土した東濃型山茶碗(117)などがわずかに認められた程度である。



第87図 E区遺構図 (1:100)



第88図 E区東壁土層断面図 (縦1:50/横1:100)



第89図 E区出土遺物実測図 (1:4)



写真30 E～G区全景／E区下面／上面遺構全景

1：E～G区全景 2：下面全景 3：上面全景

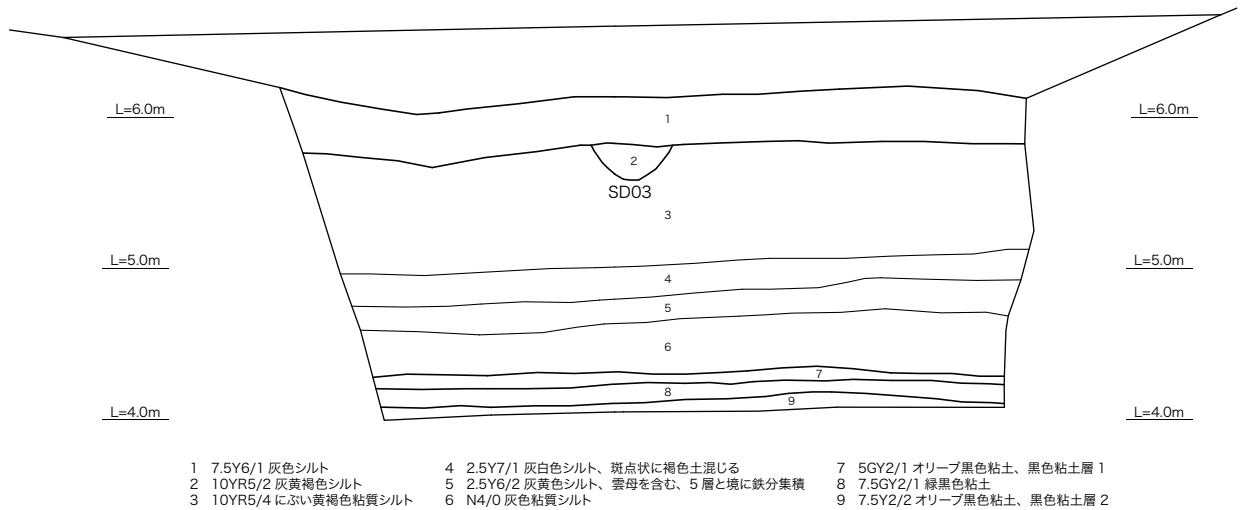
(6) F区

層序と検出遺構

F区は標高約 6.6 m までが客土、標高約 6.2 m までが旧耕作土の堆積で、旧耕作土直下において近世の遺構を検出した（第 90 図）。検出した近世の遺構は、若干の東西方向の溝と小土坑のみである。溝 SD03 などは、島畑に関する溝であると考えられる。なお、古代と中世の遺構は検出されなかった。

黒色粘土層

耕作土直下は、黄褐色粘質シルト、灰白色シルト、灰黄色シルト、灰色粘質シルト、黒色粘土、緑黒色粘土、黒色粘土が順次堆積する。黒色粘土層の上面の標高は約 4.4 m で、E 区よりやや高い。E 区と同様、灰白色シルト・灰黄色シルトが水田被覆土、灰色粘質シルトが水田耕作土、黒色粘土が水田面直下の不透水層に対応すると考えられるが、調査区が狭小なこともあって、畦畔は検出されなかった。

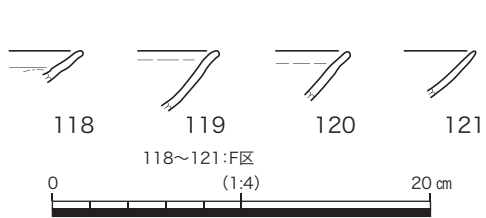


第90図 F区西壁土層断面図（縦1:50／横1:100）



写真31 F区下面／上面遺構

1：下面全景 2：上面全景

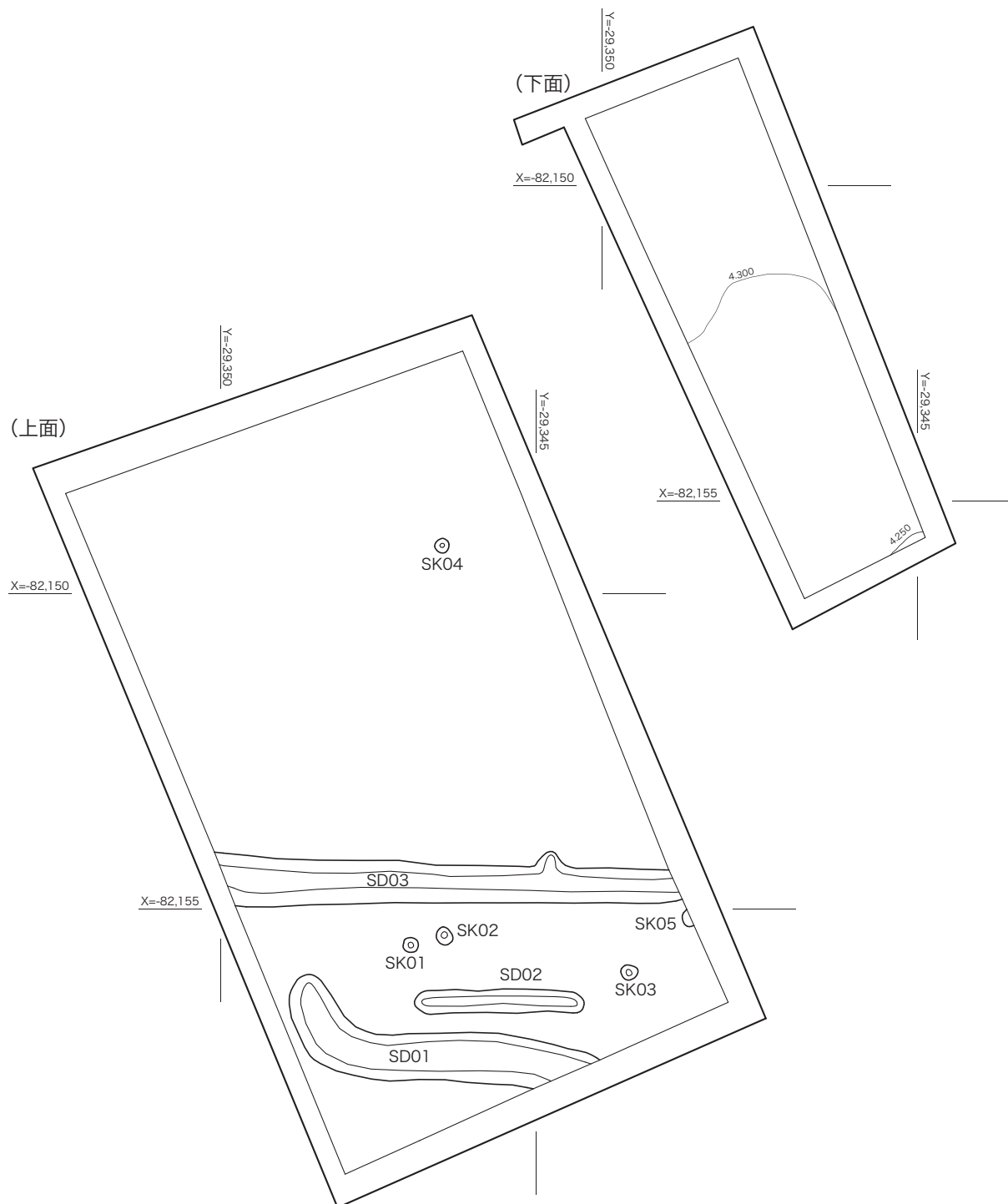


第91図 F区出土遺物実測図 (1:4)

遺物は、近世の島畑に利用された黄褐色粘質シルト層から、灰釉陶器段皿 (118)、尾張型山茶碗 (119)、東濃型山茶碗 (120・121) などをわずかに抽出したのみである。相対的には 13 ～ 14 世紀のものが多い。これらは、島畑形成時期の上限を示す資料であると考えられる。

出土遺物

島畑形成時期



第92図 F区遺構図 (1:100)

(7) G区

層序と検出遺構

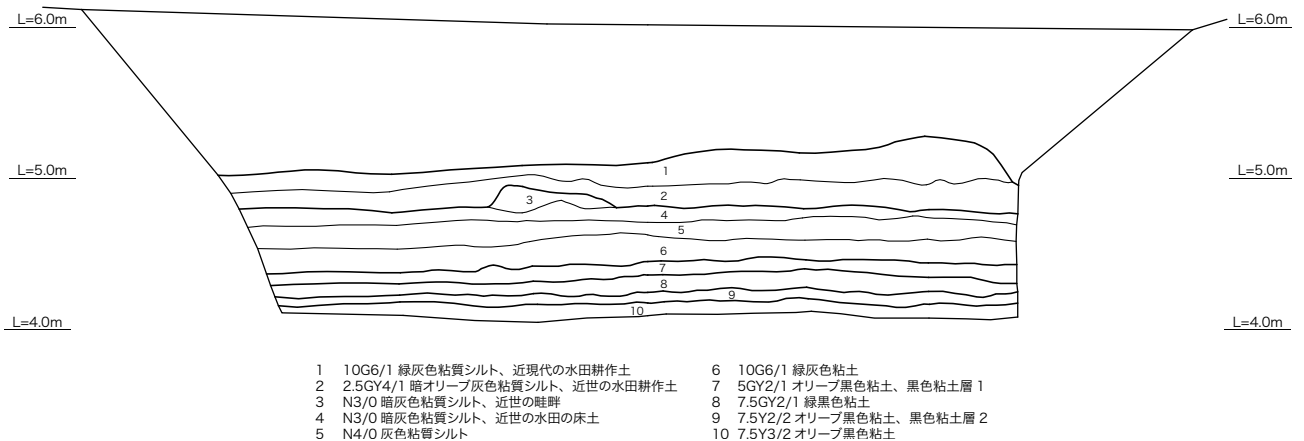
G区は標高約5.2mまでが客土、標高約4.8mまでが耕作土の堆積で、旧耕作土直下において近世の水田に関する遺構を検出した(第93図)。遺構は水田を区画する畦畔と溝で、溝SD01が大区画、SD01以外の溝が小区画に対応する。また、水田面直下の暗灰色粘質シルトが近世水田の不透水層である。なお、古代と中世の遺構は検出されなかった。

黒色粘土層

暗灰色粘質シルト層以下は、灰色粘質シルト、緑灰色粘土、黒色粘土、緑黒色粘土、黒色粘土が順次堆積する。黒色粘土層の上面の標高は約4.5mで、F区よりわずかに高い。黒色粘土層上面においては、C区と同様の小区画水田を検出したが、畦畔の起伏は土壌の流出、圧密化によってほとんど失われていて、畦畔の痕跡から水田区画のみを検出したにすぎない。

出土遺物

遺物は近世の水田を区画する溝から、瀬戸片口鉢(122)、古瀬戸後Ⅳ期の盤類(123)など、中世と近世の陶器・陶磁器がわずかに出土したのみである。

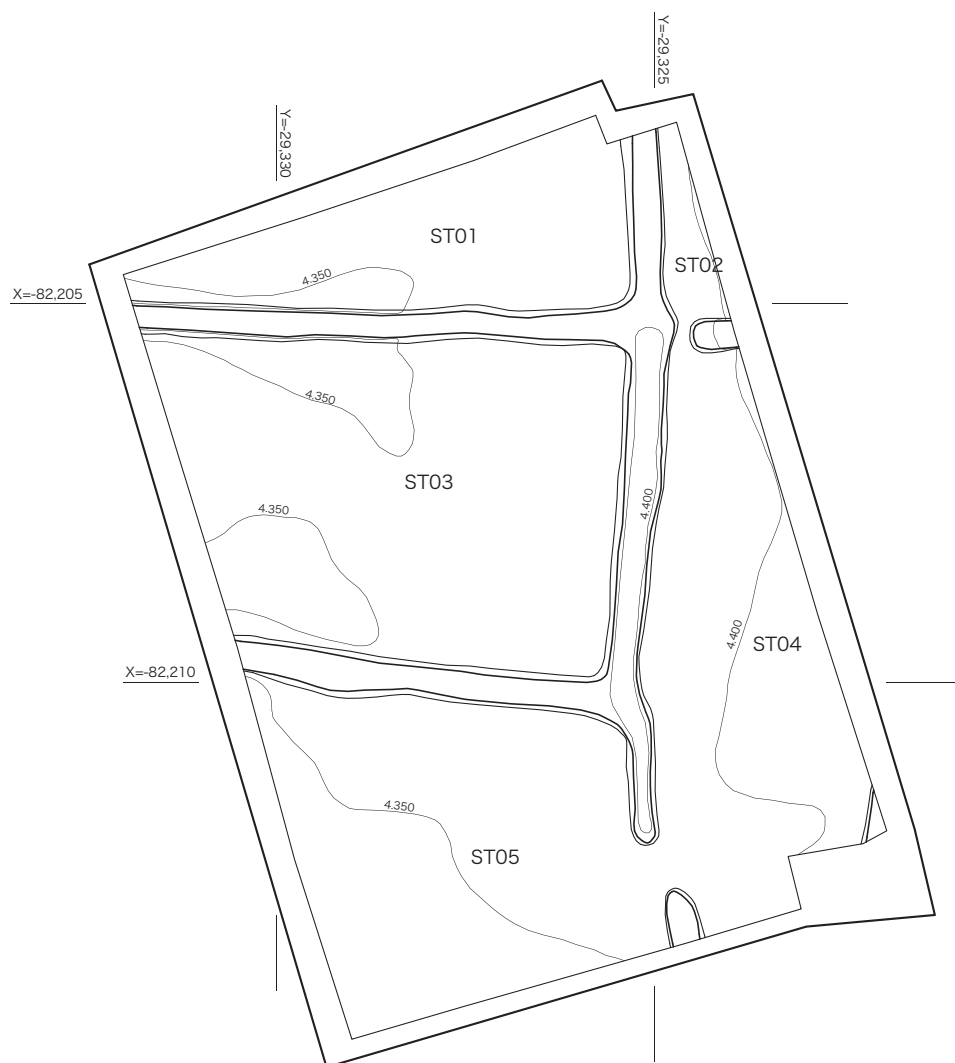


第93図 G区東壁土層断面図 (縦1:50/横1:100)



写真32 G区下面/上面遺構全景

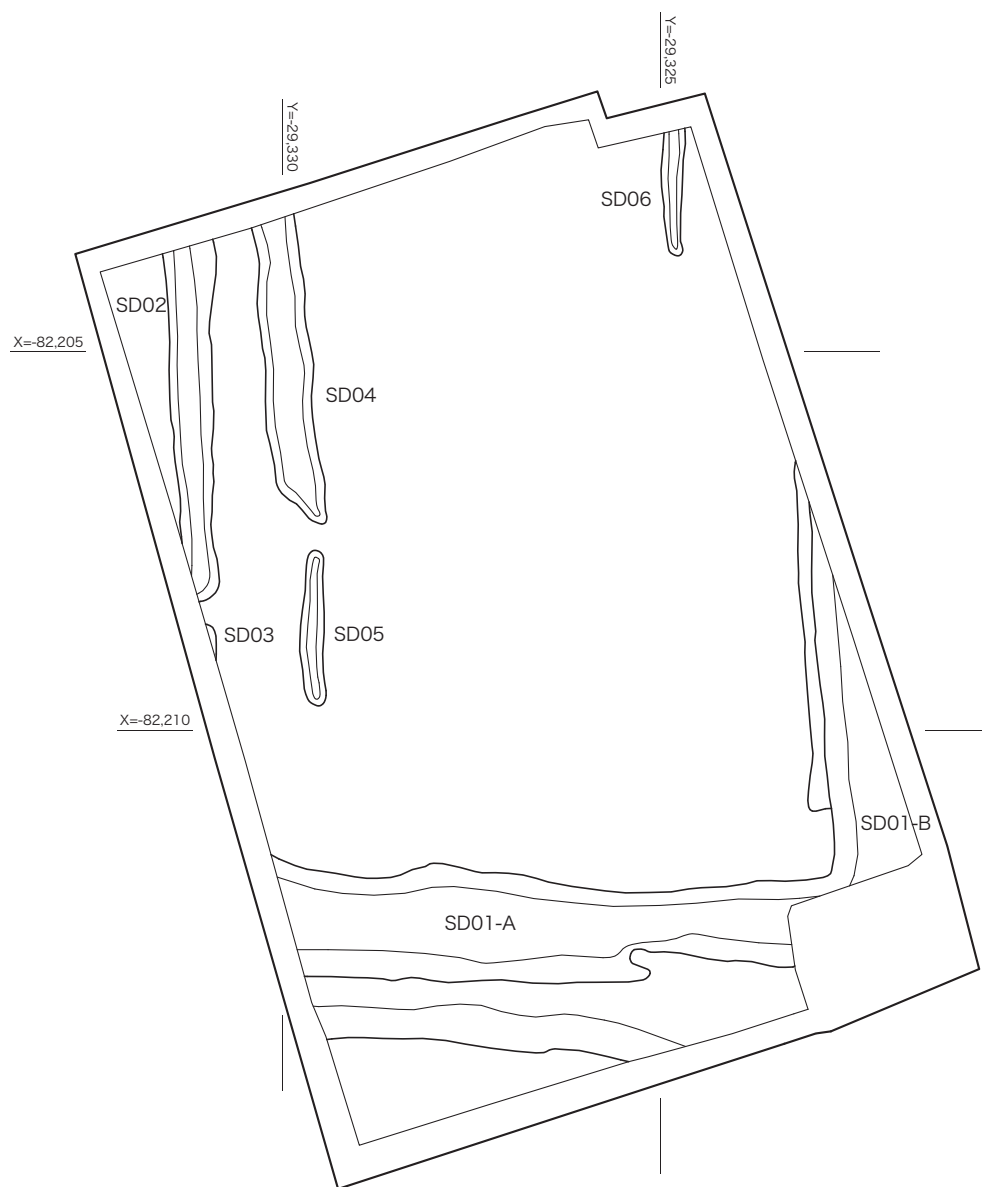
1: 下面全景 2: 上面全景



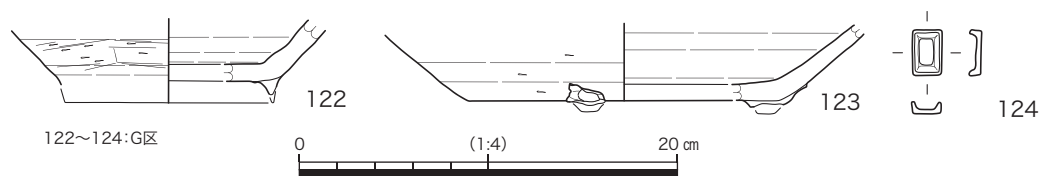
第94図 G区下面遺構図 (1:100)

文献

- 植崎彰一・斎藤孝正1983「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』愛知県教育委員会
 城ヶ谷和広1991「古代尾張の土師器～6世紀後半から11世紀の様相～」『年報』平成2年度 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
 藤澤良祐1991「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター
 藤澤良祐1991「古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要X』瀬戸市歴史民俗資料館
 中野晴久1995「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館
 藤澤良祐1995「瀬戸古窯址群Ⅲ—古瀬戸前期様式の編年—」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第3輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
 蔭山誠一他2002『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
 藤澤良祐2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター2002『江戸時代の瀬戸窯』



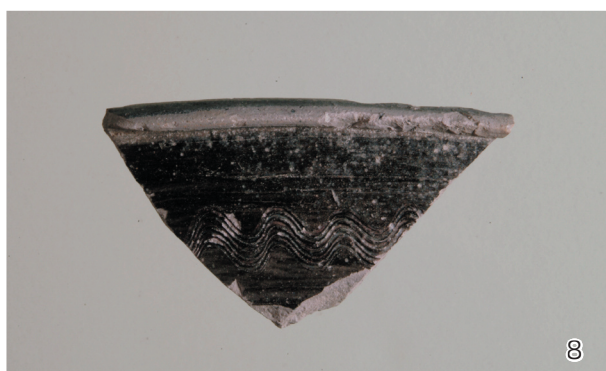
第95図 G区上面遺構図 (1:100)



第96図 G区出土遺物実測図 (1:4)



1



8



58



74



76



74



79



80



82

写真33 各調査区出土遺物

第4章 分析・考察

(1) 放射性炭素年代測定

山形秀樹（株式会社パレオ・ラボ）

1 はじめに

伝法寺本郷遺跡より検出された植物片、木片、および有機質土の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

2 試料と方法

試料は、NR01 上層（23 層）植物遺体層中から採取した植物片 1 点、NR01 下層（29 層）植物遺体層中から採取した木片 1 点、南壁から採取した有機質土 7 点、深掘により採取した有機質土 3 点の併せて 12 点である。

有機質土試料は、125 μm のフルイを用いて湿式篩い分けを行ない、フルイを通過したものだけを用い、酸洗浄を施して不純物を除去した。その他の試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去した。これら前処理された試料を石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。

3 結果

第3表に、各試料の同位体分別効果の補正值（基準値 -25.0%）、同位体分別効果による測定誤差を補正した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C 年代値 (yrBP) の算出は、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差 (One sigma) に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が 68% であることを意味する。

暦年代較正

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年) を較正し、より正確な年代を求めるために、 ^{14}C 年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚の U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて ^{14}C 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C 年代を暦年代に較正した年代の算出に CALIB 4.3 (CALIB 3.0 のバージョンアップ版) を使用した。なお、暦年代較正值は ^{14}C 年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、 1σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10% 未満についてはその表示を省略した。 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

文献

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代、p.3-20.
 Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.
 Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

第3表 放射性炭素年代測定及び暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{org}}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1σ 暦年代範囲
PLD-1551 (AMS)	A区植物片 NR01上層(23層) 植物遺体層	-24.2	1370 ± 30	cal AD 660	<u>cal AD 645 - 680 (100%)</u>
PLD-1552 (AMS)	A区木片 NR01下層(29層) 植物遺体層	-26.0	1335 ± 30	cal AD 670	<u>cal AD 660 - 690 (82.3%)</u>
PLD-1553 (AMS)	C区有機質土 南壁 ^{14}C -1	-20.6	4385 ± 35	cal BC 3015 cal BC 2980 cal BC 2965 cal BC 2950 cal BC 2935	<u>cal BC 3020 - 2925 (97.1%)</u>
PLD-1554 (AMS)	C区有機質土 南壁 ^{14}C -2	-18.2	4280 ± 35	cal BC 2890	<u>cal BC 2910 - 2880 (100%)</u>
PLD-1555 (AMS)	C区有機質土 南壁 ^{14}C -3	-20.3	4660 ± 35	cal BC 3495 cal BC 3465 cal BC 3375	<u>cal BC 3505 - 3425 (85.8%)</u> cal BC 3380 - 3370 (14.2%)
PLD-1556 (AMS)	C区有機質土 南壁 ^{14}C -4	-16.4	4075 ± 35	cal BC 2620 cal BC 2610 cal BC 2580	cal BC 2835 - 2820 (11.9%) cal BC 2665 - 2645 (11.9%) <u>cal BC 2635 - 2570 (61.8%)</u> cal BC 2520 - 2500 (14.4%)
PLD-1557 (AMS)	C区有機質土 南壁 ^{14}C -5	-18.9	3320 ± 35	cal BC 1615	cal BC 1625 - 1600 (31.6%) <u>cal BC 1590 - 1525 (58.9%)</u>
PLD-1558 (AMS)	C区有機質土 南壁 ^{14}C -6	-18.6	2140 ± 30	cal BC 170	cal BC 340 - 325 (10.2%) <u>cal BC 200 - 115 (89.8%)</u>
PLD-1559 (AMS)	C区有機質土 南壁 ^{14}C -7	-26.1	4510 ± 35	cal BC 3330 cal BC 3215 cal BC 3185 cal BC 3155 cal BC 3125	cal BC 3345 - 3310 (22.0%) <u>cal BC 3235 - 3170 (42.4%)</u> cal BC 3160 - 3105 (35.5%)
PLD-1560 (AMS)	D区有機質土 深掘1	-23.4	2160 ± 30	cal BC 200 cal BC 185	cal BC 350 - 315 (34.4%) <u>cal BC 210 - 165 (50.4%)</u>
PLD-1561 (AMS)	D区有機質土 深掘2 (-2m)	-19.6	4325 ± 35	cal BC 2915	cal BC 3010 - 2985 (31.0%) <u>cal BC 2925 - 2890 (67.4%)</u>
PLD-1562 (AMS)	D区有機質土 深掘3 植物遺体層(-3m)	-26.4	4510 ± 35	cal BC 3330 cal BC 3215 cal BC 3185 cal BC 3155 cal BC 3120	cal BC 3340 - 3305 (21.1%) <u>cal BC 3240 - 3170 (42.2%)</u> cal BC 3140 - 3100 (24.0%)

(2) 伝法寺本郷遺跡 A 区 NR01 出土自然木の樹種同定

植田弥生 (株式会社パレオ・ラボ)

1 はじめに

ここでは、古代 (7～9 世紀) の流路 A 区 NR01 から出土した自然木 17 点の樹種同定結果を報告する。出土状況からは、周辺地から流されて来た木材と周辺に生育していた樹木が堆積した状態と考えられている。これら木材の樹種を明らかにし、当時の周辺植生の資料とする目的で樹種同定は実施された。

2 試料と方法

材の 3 方向 (横断面・接線断面・放射断面) を見定めて、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラルで封入し、永久プレパラート (材組織標本) を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で 40～400 倍に拡大し観察した。

材組織標本は、パレオ・ラボに保管されている。

3 結果

同定結果の一覧を、第 4 表に示した。

17 点から検出された分類群は、ツガ属 (5 点)・ヒノキ (3 点) の針葉樹 2 分類群、コナラ節 (4 点)・カバノキ属 (2 点)・ヤシャブシ亜属 (1 点)・クリ (1 点)・ケヤキ (1 点) の落葉広葉樹 5 分類群、合計 7 分類群であった。

最も多く検出されたツガ属からは、材の形状に次の異なる状態が見られた。それは、芯持ち丸木 (No. 52・54)、根張りの形状に似ているもの (深堀)、遠方地から流れて来て堆積したために磨耗したと思われる破片 (No.56)、加工木の可能性もある棒状のもの (No.49) である。No.52 の芯持ち丸木材には樹皮があることから、この材は遠方地から流されたとは考え難い。

ヒノキ 3 点は、根張りかと思われる形状の材、芯持ち丸木、破片で異なる形状であった。

落葉広葉樹で最も多いコナラ節 4 点は、芯持ち丸木 3 点と、丸木の一部破片が 1 点であった。そのほかの広葉樹材も、芯持ち丸木と、比較的大きな材の一部破片と思われるものであった。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の 3 方向の組織写真を提示した。

(1) ツガ属 *Tsuga* マツ科 写真 34 1a-1c (No.52)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞・放射仮道管からなる針葉樹材。接線方向に配列する傷害樹脂道が有る。放射柔細胞の壁は厚く放射断面において接線壁に数珠状肥厚がある。放射柔組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管がある。分野壁孔は小型で 2～4 個ある。

ツガ属には本州の福島県以南の暖帯から温帯下部の山地に普通のツガと、本州・四国・九州の温帯上部の深山に生育するコメツガがあるが、材組織からは 2 種を区別することはできない。材は重硬で割裂性も大きく耐久性もよい。

(2) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 写真 34 2a-2c (No. 55)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量は少ない。分野壁孔の孔口はやや斜めに細く開いたヒノキ型で 1 分野におもに 2 個が水平に整然と配列する。

ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州のやや乾燥した尾根や岩上に生育し、材は耐久

性・切削性・割裂性にすぐれる。

(3) カバノキ属 *Betula* カバノキ科 写真 34 3a-3c(No. 51)

中型の管孔が単独または放射方向に複合した2～数個の管孔が分布する散孔材。道管の壁孔は非常に小型で密在し、穿孔は階段数が10～15本の階段穿孔。放射組織はほぼ同性、1～3細胞幅である。

カバノキ属は温帯から寒帯の山地の陽地に生育する落葉性の高木または低木で、約9種がある。本州以南に分布するミズメ、岐阜県以東に分布し崩壊地に二次林を形成するシラカンバ、高山に多いウダイカンバなどがある。材は重硬で有用材である。

(4) ヤシャブシ亜属 *Alnus subgen. Alnaster* カバノキ科 写真 35 4a-4c(No. 43)

単独または2～3個の小型の管孔が複合し管孔の分布はやや疎らな散孔材。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は20本前後の階段穿孔である。放射組織は単列同性、道管との壁孔は小型で交互状に密在する。

ヤシャブシ亜属は山地に生育する落葉小高木または低木である。寒帯から温帯上部に生育するミヤマハンノキ、暖帯から温帯の山中の痩せ地や崩壊地に生育するヒメヤシャブシ、関東から紀伊半島の暖帯の海岸に近い山地に分布するオオバヤシャブシ、本州南部太平洋側に分布するヤシャブシがある。

(5) コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus subgen. Quercus sect. Prinus* ブナ科 写真 35 5a-5c(No. 42)

年輪の始めに大型の管孔が配列し、晩材部は薄壁・角形で小型の管孔が火炎状・放射方向に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものと広放射組織・複合状のものとがある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。材は硬く丈夫で利用度の高い有用材である。

(6) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 写真 35 6a-6c(No. 41)

年輪の始めに大型の管孔が密に配列し除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。材は粘りがあり耐朽性にすぐれている。

(7) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 写真 36 7a-4c(No. 53)

年輪の始めに大型の管孔が1～3層配列し、その後は小型の管孔が多数集合して接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～5細胞幅の紡錘形、上下端や縁に結晶細胞があり、道管との壁孔は交互状である。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。材質は堅い。

4 まとめ

古代(7～9世紀)の流路A区NR01から出土した木材17点は、ツガ属(5点)・ヒノキ(3点)の針葉樹とコナラ節(4点)・カバノキ属(2点)・ヤシャブシ亜属(1点)・クリ(1点)・ケヤキ(1点)の落葉広葉樹であった。ツガ属には温帯下部の低山地にも生育するツガと、

それよりも標高の高い温帯上部に生育するコメツガがあり、材組織からは種類を識別できない。しかし、共に検出された針葉樹のヒノキとツガは温帯性針葉樹であり、ツガ属には根張り材や樹皮付きの丸木材が検出されたことから、遠方から流されて来たとは考えにくいので、遺跡周辺地の森林に生育していた可能性があり、標高から考えてもツガ属はツガの可能性が高いと思われる。しかし当遺跡は谷筋に沿った低地であり、周囲も標高 10 m 前後の沖積低地である。標高の高い島状の地点にツガ属が生育していたと断定するには、今後も周辺地の調査結果の蓄積が必要と思われる。

落葉広葉樹の樹種構成からは、いずれも陽光地を好む樹種で二次林にも生育している樹種が多かった。しかし、典型的二次林要素のコナラ節、クヌギ節、マツ属複維管束亜属は少ないか、検出されなかったので、人為的干渉や影響力が少なかった落葉広葉樹林が遺跡周辺に成立していた可能性が考えられる。

第4表 A区NR01出土自然木樹種同定結果一覧

調査区	遺構	遺物No	樹種	取り上げ後の形状	備考	時期
B	深堀 NR01		ツガ属	根張りか	幅10cm以上	7～9世紀
A	IXF3b NR01	No.41	クリ	芯去り破片	放射径15.0cm×接線径8.0cm 約75年輪あり	7～9世紀
A	IXF2b NR01	No.42	コナラ節	芯持ち丸木	直径10.0cm	7～9世紀
A	IXF2b NR01	No.43	ヤシャブシ亜属	丸木破片	放射径6.0cm×接線径7.0cm	7～9世紀
A	IXF2a NR01	No.44	コナラ節	芯持ち丸木	直径9.0cm	7～9世紀
A	IXF2a NR01	No.45	ヒノキ	芯去り、破片	丸木破片	7～9世紀
A	IXF3a NR01	No.46	コナラ節	芯持ち丸木	扁平、樹芯は中央にある 長径8.5cm,短径7.0cm	7～9世紀
A	IXF3a NR01	No.47	ヒノキ	芯持ち丸木	直径13.0cm	7～9世紀
A	IXF2a NR01	No.48	カバノキ属	芯持ち丸木	扁平、樹芯は中央にある 長径8.5cm,短径5.5cm	7～9世紀
A	IXF2a NR01	No.49	ツガ属	芯去り棒状	放射径4.5cm×接線径2.5cm 長さ22.0cm	7～9世紀
A	IXF2a NR01	No.50	コナラ節	丸木破片	放射径11.0cm×接線径11.0cm	7～9世紀
A	IXF2a NR01	No.51	カバノキ属	芯去り、破片	放射径10.0cm×接線径6.0cm	7～9世紀
A	IXF3b NR01	No.52	ツガ属	芯持ち丸木 樹皮付	直径5.5cm 約80年輪あり	7～9世紀
A	IXF3b NR01	No.53	ケヤキ	芯去り、破片	放射径6.0cm×接線径8.5cm	7～9世紀
A	IXF3b NR01	No.54	ツガ属	芯持ち丸木	扁平、樹芯偏在 長径8.5cm,短径4.5cm	7～9世紀
A	IXF2a NR01	No.55	ヒノキ	根張りか	幅10cm以上	7～9世紀
A	IXF2a NR01	No.56	ツガ属	磨耗した破片	放射径7.0cm×接線径7.0cm	7～9世紀

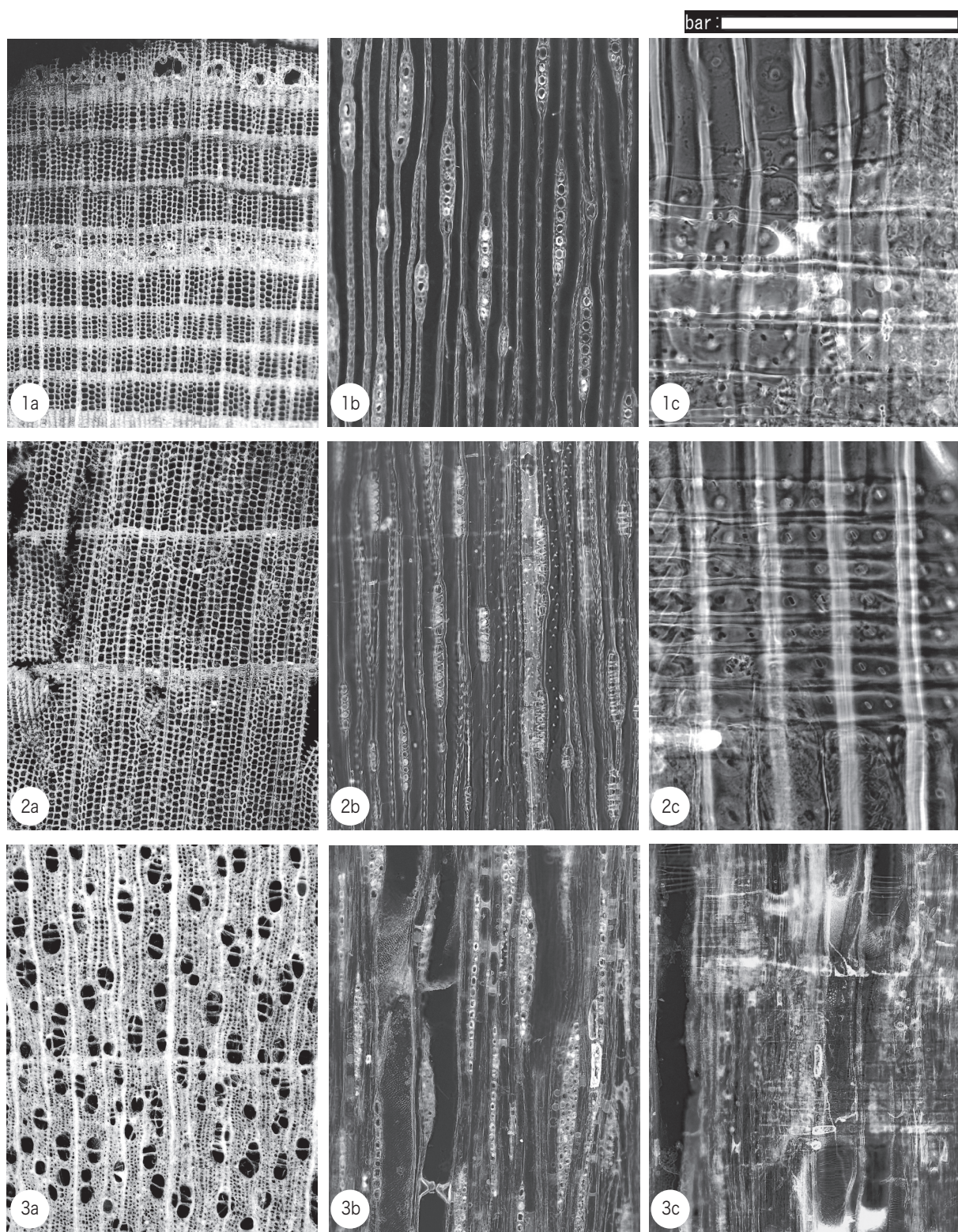


写真34 A区NR01出土自然木の材組織光学顕微鏡写真1

1a-1c:ツガ属(No.52) 2a-2c:ヒノキ(No.55) 3a-3c:カバノキ属(No.51)

a:横断面 b:接線断面 c:放射断面 bar:a=1.0mm,b・3c=0.4mm,1c・2c=0.1mm

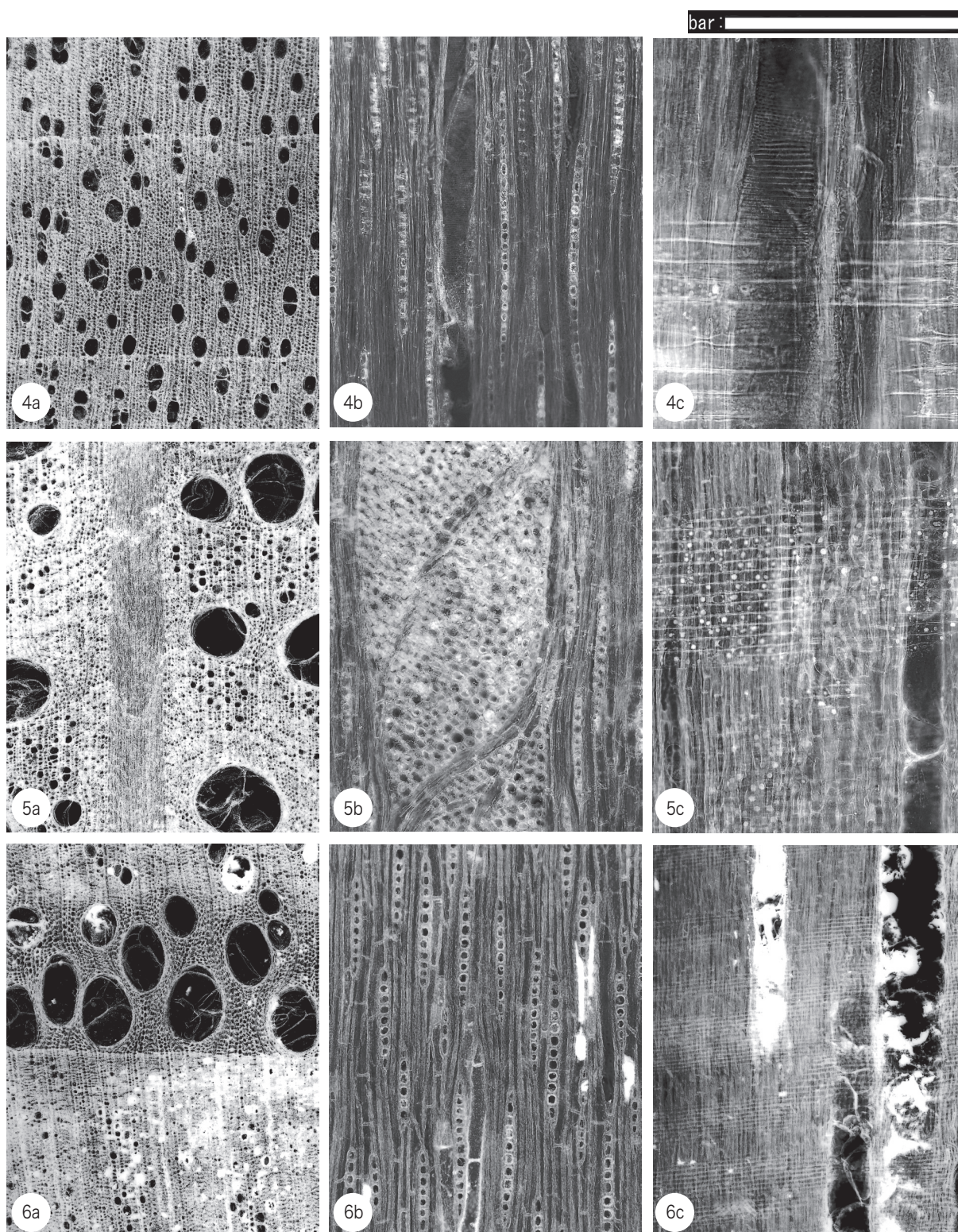


写真35 A区NR01出土自然木の材組織光学顕微鏡写真2

4a-4c:ヤシャブシ亜属(No.43) 5a-5c:コナラ節(No.42) 6a-6c:クリ(No.41)

a:横断面 b:接線断面 c:放射断面 bar:a・6c=1.0mm,b・5c=0.4mm,4c=0.2mm

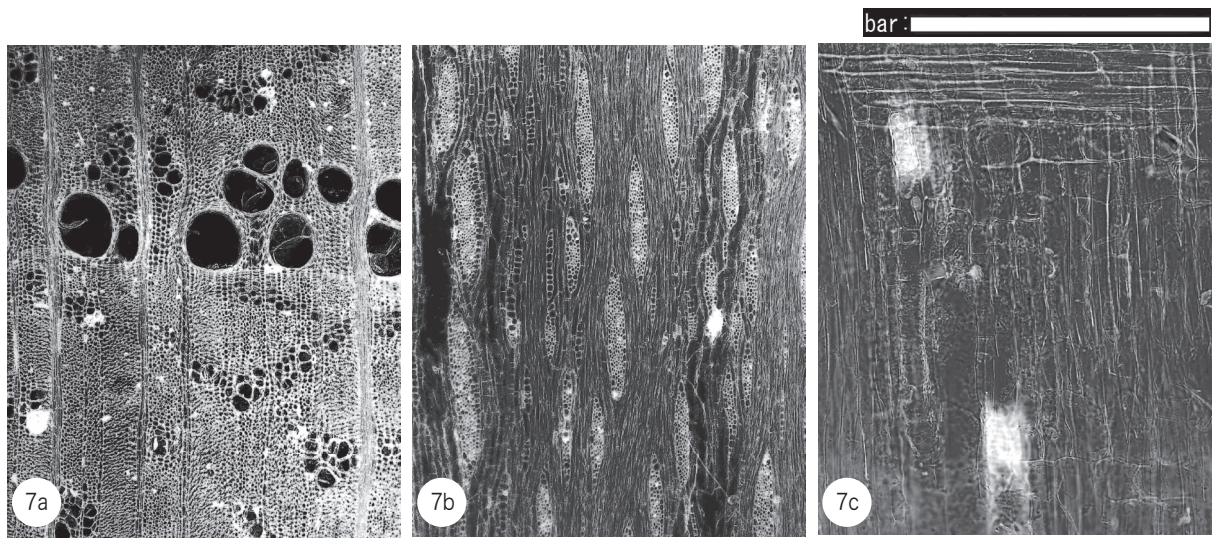


写真36 A区NR01出土自然木の材組織光学顕微鏡写真3

7a-7c: ケヤキ (No. 53)

a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面 bar: a=1.0mm, b=0.4mm, c=0.2mm

(3) 史料からみた伝法寺・宇福寺・中之郷の中近世

鵜飼雅弘

伝法寺本郷遺跡・中之郷北遺跡を含む一帯は、幼川（五条川）と青木川の合流地点にあたり、幼川をはさんで南北に丹羽郡と春日井郡、青木川の西に中島郡の三郡が境を接する。伝法寺村及び五日市場村は丹羽郡、宇福寺村・中之郷村・落合村は春日井郡に属する。

曹洞宗正眼寺

地名としての伝法寺・宇福寺が確認されるのは室町時代、曹洞宗正眼寺の寺領として寄進されてからである。松平君山・千村伯斎撰『張州府志』記載の寺伝によると、正眼寺は応永元（1394）年、青生直正により中島郡下津に建立された。直正は師事していた天鷹禅師を迎え、開山を通幻禅師として伽藍を整備し、応永三（1396）年に後小松院の綸旨を得て勅願寺となった。また同書では応永四（1397）年宇福寺・北嶋・三井を寺領としたとあるが、応永五（1398）年六月九日付け足利義満朱印状では「尾張国春日井郡宇福寺村並丹羽郡伝法寺村同北嶋村」と書かれており（『東春日井郡史』所載）、三井は伝法寺村域を含めた地域か、あるいは伝法寺村の誤りである可能性がある。その後正眼寺は尾張屈指の曹洞宗の寺院として天文九（1540）年に足利義晴、永禄五（1562）年に織田信長により寺領安堵を受けた。文禄四（1595）年八月には豊臣秀吉から山之腰村（江戸時代は宇福寺村の枝村）に寺領四十石五斗を安堵され、その後尾張藩からも安堵されている。正保五（1648）年三月には能登総持寺から僧綱に列せられるが、慶安二（1649）年には雲興寺との間に本末論争が起きる。元禄二（1689）年願いにより三刈村（現小牧市）に移転した。寺域については天保十二（1841）年「伝法寺村絵図」（徳川林政史研究所蔵、第97図）に「正眼寺旧跡」と記載されており、01 調査区G区の南、字寺跡に該当する。伝法寺村の西には守護所の所在した下津村があり、青木川をはさんで隣接する。文献史料でも「下津正眼寺」と記載するものがあり、検討を要する。

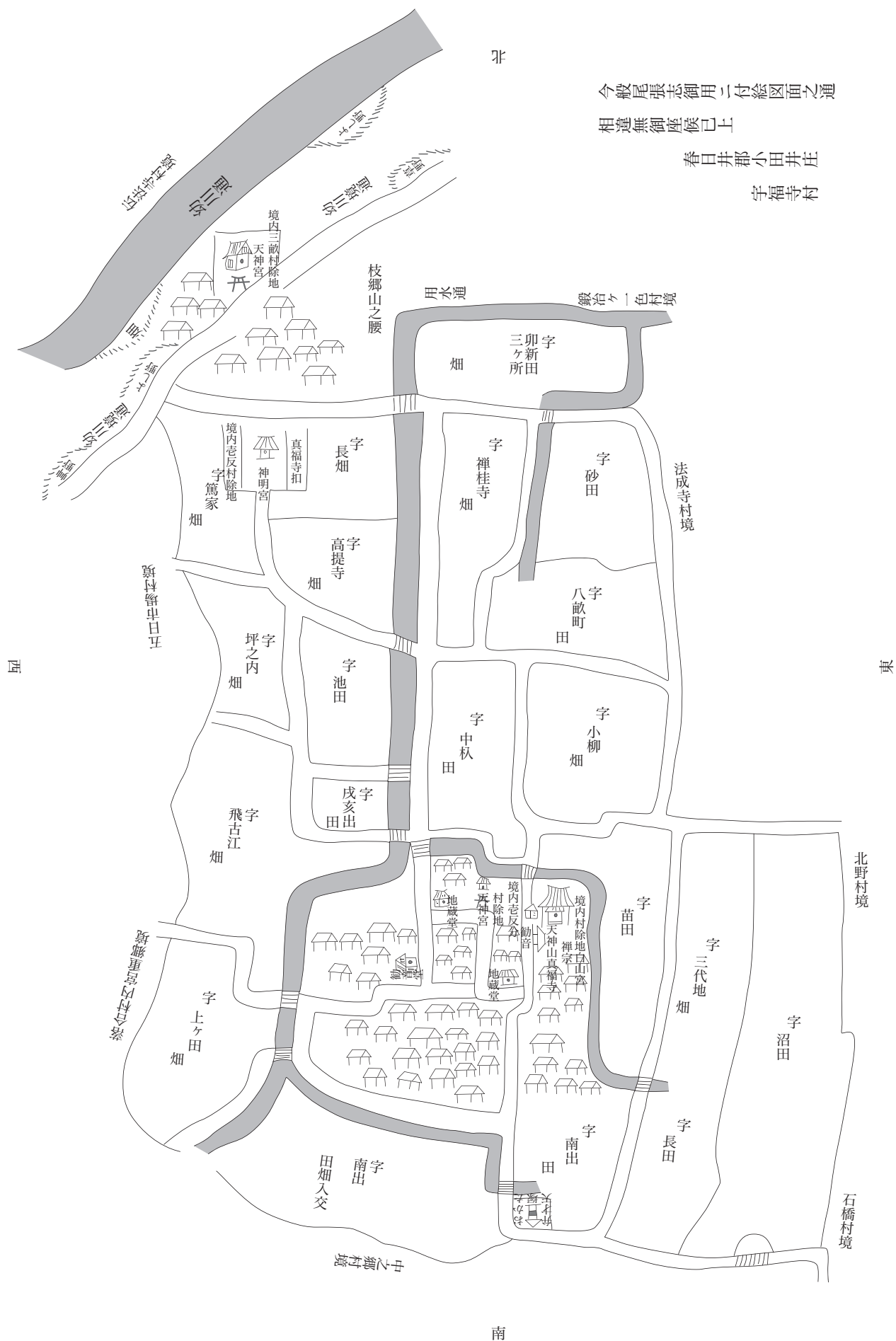
宇福寺村・中之郷村

一方宇福寺村および中之郷村の成立について文献資料はきわめて少なく、織豊期以前の状況は不明である。しかし『尾張徇行記』記載の寺院について周辺の村落を含めてみると、室町時代以降の開基とするもの、あるいは不明とする寺院が多い。このうち宇福寺村真福寺は康正元（1455）年正眼寺三世天光の開基、落合村仏音寺は永正十一（1514）年創建とあり、いずれも正眼寺の末寺である。他村で見られる正眼寺の末寺のうち、創建年次の判明するものはこの時期か、あるいは17世紀前半のものが多く、寺勢拡大の動きとともに注目される。なお真福寺は創建当初は字高提寺にあったが、延享四（1687）年現在地に移転し、寺跡には天神社が残ったとする（『張州雑志』）。また浄土真宗では中之郷村本教寺が天文十（1541）年美濃国大願寺末寺として成立しており、のち東本願寺末寺に転じた（『張州雑志』）。

寺跡



第97図 伝法寺本郷遺跡調査区と地籍図の照合 (1:2,500)



第99図 春日井郡宇福寺村絵図

(西春町1983『西春町史』資料編1解説より)

第5章 まとめ

低地遺跡

伝法寺本郷遺跡は、五条川と青木川に挟まれた標高6 m前後の自然堤防、後背湿地上に立地する遺跡である。今回の発掘調査の結果、河川、耕作地、集落域が連続して展開する低地遺跡の実体を明らかにした。本報告のまとめとして、低地遺跡としての本遺跡が示す土地利用の変遷とその特質について、時代を追って記述する。

古墳時代

水田

最初、遺跡は水田として開発される。耕地化の時期を推定する材料は乏しいが、層位から少なくとも古代以前であることは明らかで、出土遺物からは古墳時代と推定した。水田はC区、G区において検出され、水田相当層は、自然堤防の縁辺に相当するB～C区、G区において確認されたことから、少なくとも南北2 km以上に及ぶ広範囲が耕地化の対象とされたとみられる。元屋敷遺跡においては弥生時代前期に安定した集落が形成され、伝法寺野田遺跡においては弥生時代中期の水田、飯守神遺跡においては弥生時代中期の遺構と遺物が検出されている。元屋敷遺跡や飯守神遺跡など、扇状地末端近くの自然堤防上において集落が形成される流れに応じて、伝法寺野田遺跡など自然堤防縁辺の後背地から可耕地が段階的に獲得され、古墳時代に及んで伝法寺本郷遺跡の周辺の後背地が耕地化の対象とされたのであろう。

伝法寺野田遺跡

古代

河川

古代以降、河川活動が活発化し、堆積環境が不安定化する。A・B区においては南北に縦貫する五条川、あるいは青木川の支流とも推定される河川を検出した。河川活動が活発化する時期については、A・B区に包含される古代の遺物が7～9世紀に相当すること、A区の河川内の堆積層から採取した植物片や木片のいずれもが、放射性炭素年代測定の結果、7世紀の年代を示したこと（第4章（1）を参照）、河川の上層に13世紀前半の遺構が掘削されることから、7～12世紀であったことが確かめられる。A区において採取した自然木の樹種同定結果が、遺跡周囲の植生に人為的干渉が少なかったことを示唆したこと（第4章（2）を参照）からも、この段階の開発は概して低調であったとみてよい。

集落立地

同時に、河川、後背地間に点在する相対的に古い自然堤防上が集落立地の対象とされるようになる。自然堤防はC区南東部分を北西端として、D区からF区にかけて広がっていたと推定されるが、相対的に高いE・F区では中世以降に完全に削剥されたためか、古代の遺構・遺物は検出されなかった。一方、自然堤防上でも縁辺に近いD区では、竪穴住居から構成される居住地が確認された。D区の遺構、包含層から出土する遺物は、折戸10号窯式期に相当する遺物によってほぼ占められること、竪穴住居相互に重複関係が認められなかった。この事実から、自然堤防縁辺にまで集落形成が拡大したのは8世紀後半でもごく限られた時期であったことが推測される。

周辺の古代の遺跡

さて、本遺跡の周辺には、同様の集落立地を志向する古代の遺跡が多い。三ツ井遺跡、西大門遺跡、飯守神遺跡、岩倉市権現山遺跡、西春町中之郷北遺跡などである。三ツ井遺跡や権現山遺跡などでは、多分に地形条件に規制された地割が展開していることから、やはり大規模な土地開発は、中世を待たなければならなかったようである。

一方、D区における同時期の特徴的な出土遺物として、金属製品生産関連遺物がある。それらは、羽口、鋳型と推定した土製品など、複数の副産物によって構成されることから、付近における操業も推定される。また、本書で報告する中之郷北遺跡の同時期の集落においても金属製品生産関連遺物が一定量出土する。周辺の遺跡についての知見が増加し、中核となる集落の内容が明らかになれば、各種生産物の生産、供給体制から、古代における集落の存在形態、集落間の関係について具体的に論じることも可能となるであろう。

金属製品製作関連

中世以降

A・B区の河川は、上層が粗粒砂によって埋積することから、大規模な氾濫によって短期間に埋没したとみられる。その一方、周囲には相対的に新しい自然堤防が形成され、13世紀以降、A区を中心として中世遺構が展開する。検出遺構はほぼ南北方向に設定された溝群で、同一地点において連続して掘削されていることが確かめられた。地籍図と照合した結果から、溝は伝法寺村と九日市場村との村境の溝に相当する可能性が高く、溝からは、12世紀後半から近代までの遺物が断続的に出土することから、A区の溝群は中世から近世、近代を通じて村境の溝として機能したことも推測される。翻って、伝法寺村など、遺跡周辺における「村」成立の端緒も12世紀後半に求められることになる。

自然堤防の形成

村境の溝

伝法寺村の成立

一方、1221年（承久3）の下津川（青木川）大洪水の記述からも、12～13世紀までは堆積環境が不安定な状態が継続し、それ以降は地形が徐々に安定化したとみられる。稲沢市下津北山遺跡をはじめとする下津地区の遺跡、本書で報告する島崎遺跡など、現五条川右岸、青木川両岸における中世の遺跡の形成が本格化する流れも、堆積環境の安定化を前提としたものであったろう。また、13世紀後半以降の各史料が、鎌倉街道の宿駅となった下津を往来する記事を伝えていることから、この頃までに鎌倉街道はかなり整備されていたことが想像される。本遺跡や五輪ヶ淵遺跡など伝法寺地区における中世の遺跡形成も、鎌倉街道と下津宿、下津市の整備に連なった動態であった可能性が考えられるであろう。

鎌倉街道と下津宿

近世以降、遺跡周辺は水田と島畑が交錯する土地利用形態に移行する。本遺跡の調査の過程においても島畑あるいは水田が連続して検出された。特記すべきはC・F区における調査成果で、C区においては島畑の造成土中に15世紀までの遺物が含まれていたことから、周辺における島畑景観の形成は15世紀以降と考えられた。史料によれば、伝法寺村は応永年間には曹洞宗正眼寺の寺領であったという（第4章（3）を参照）。正眼寺は尾張屈指の曹洞宗の寺院として、16～17世紀にはたびたび安堵を受けていることから、15世紀以降における遺跡周辺の開発は、正眼寺を核として展開した可能性がある。

島畑景観の形成

正眼寺による開発

文献

早野浩二1999「伝法寺野田遺跡」『年報』平成10年度 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

田中伸明編1999『三ツ井遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第87集 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

早野浩二編2000『下津北山遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第88集 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

早野浩二編2003『権現山遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第110集 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター

土本典生2003『西大門遺跡・飯守神遺跡・五輪ヶ淵遺跡発掘調査報告書』一宮市文化財調査報告Ⅲ 一宮市教育委員会

土本典生2004『元屋敷遺跡発掘調査報告書Ⅱ』一宮市文化財調査報告Ⅳ 一宮市教育委員会



第100図 伝法寺本郷遺跡の景観復原 (1:2,500)

ふりがな	しまぎいせき・でんぼうじほんごういせき・なかのごうきたいせき
書名	島崎遺跡・伝法寺本郷遺跡・中之郷北遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第139集
編著者名	宮腰健司・鶴飼雅弘・早野浩二・山形秀樹・植田弥生・馬場健司・辻本裕也・藤根 久・長友純子・小村美代子・森 勇一他
編集機関	財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24 TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しまぎいせき 島崎遺跡	あいちけんいちのみやし 愛知県一宮市 しまぎ 島崎	23203	02107	35度 17分 13秒	136度 49分 46秒	20010113 ∟ 20010327	2,000	県道高速 清洲一宮線 建設
でんぼうじほんごう 伝法寺本郷 いせき 遺跡	あいちけんいちのみやし 愛知県一宮市 たんようちょうでんぼうじ 丹陽町伝法寺	23203	02108	35度 15分 35秒	136度 50分 36秒	20010409 ∟ 20010530 20010827 20010919	1,600	
なかのごうきた 中之郷北 いせき 遺跡	あいちけんにしがすがいぐん 愛知県西春日井郡 にしはるちうなかのごう 西春町中之郷	23344	19016	35度 14分 37秒	136度 50分 52秒	20011003 ∟ 20020214	2,400	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
島崎遺跡	集落	鎌倉～室町 江戸	溝・土坑・井戸 水田	山茶碗・常滑陶器 瀬戸美濃陶磁器 土師器皿・土師器鍋 銭貨・刀子	
伝法寺本郷 遺跡	集落	古墳 奈良～平安 鎌倉～室町 江戸	水田 河川・竪穴住居 溝 畠・水田	土師器 土師器・須恵器 山茶碗・古瀬戸・常滑陶器 瀬戸美濃陶器	奈良時代の集落
中之郷北 遺跡	集落	古墳 飛鳥～奈良 鎌倉～室町 江戸	溝・竪穴住居 河川・竪穴住居 溝 畠・水田	土師器・須恵器・鉄製品 土師器・須恵器 山茶碗・古瀬戸・常滑陶器 瀬戸美濃陶器	土師器の一括資料 古墳～奈良時代の金属 製品製作関連遺物の 出土

文書番号 (島崎遺跡)	発掘届出(12埋セ第173号 12.12.5) 終了届・保管証・発見届(12埋セ第220号 13.3.28)	通知(12教生第216-40号 12.12.25) 鑑査結果通知(12教生第216-40号 13.5.28)
文書番号 (中之郷北遺跡)	発掘届出(12埋セ第208-14号 13.3.16) 終了届・保管証・発見届(13埋セ第101号 13.9.27)	通知(12教生第216-46号 13.3.28) 鑑査結果通知(13教生第216-46号 13.10.11)
文書番号 (伝法寺本郷遺跡)	発掘届出(13埋セ第72号 13.8.24) 終了届・保管証・発見届(13埋セ第169号 14.2.28)	通知(13教生第36-10号 13.9.13) 鑑査結果通知(13教生第36-10号 14.3.27)

要約	島崎遺跡は、鎌倉～室町時代には、遺跡中央部が集落域となり、北東―南西に延びる微高地地形に沿うような、溝・井戸・方形土坑が検出されている。 伝法寺本郷遺跡は、古墳時代、奈良～平安時代、鎌倉～室町時代、江戸時代の複合遺跡である。発掘調査の結果、各時代を通じた土地利用の変遷が明らかとなった。 中之郷北遺跡は、古墳時代、奈良～平安時代、鎌倉～室町時代、江戸時代の複合遺跡である。発掘調査では各時代の遺構と遺物が層序ごとに連続して検出された。発掘調査の成果は、当地域における地形発達史、土地利用史に資する重要な知見である。 なお、立会調査によって発見された宇福寺遺跡においては、古墳時代の土器を大量に採集した。
----	---

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第139集

島 崎 遺 跡
伝 法 寺 本 郷 遺 跡
中 之 郷 北 遺 跡

2006年3月31日

編集発行 財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

印 刷 西濃印刷株式会社